教育研究業績書

2024年05月20日

所属： 教育学科　　資格： 教授　　氏名： 松下　良平

研究分野	研究内容のキーワード
教育学(教育思想)	教育、学校、学習・学び、道徳教育、ジョン・デューイ
学位	最終学歴
京都大学博士(教育学)	京都大学大学院教育学研究科教育学専攻博士後期課程学修認定退学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
1.道徳教育	2017年10月3日	田中耕治編（高見茂・田中耕治・矢野智司・稲垣恭子監修『教職教養講座第６巻』の分担執筆。
2.道徳教育論	2014年04月20日	松下良平編（田中智志・橋本美保監修）「新・教職課程シリーズ」全234頁。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.教育実践研究フォーラム in 長崎大学２０１７	2017年11月12日	「シンポジウム：これからの道徳教育について考え、議論する――「特別の教科　道徳」の完全実施に向けて」発表(長崎大学文教キャンパス)
2.広島修道大学人文学部教育学科開設記念イベント「アクティブラーニングをディープに学ぼう――初等中等教育における可能性と課題を考える」	2016年06月25日	講演「アクティブラーニングをテツガクする――俯瞰すると見えてくる意外な世界」
4 その他		
1.日本デューイ学会研究奨励賞受賞	1987年9月5日	

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.実践につながる道徳教育論	共	2024年5月	北樹出版	藤川信夫監修、國崎大恩・Kim Mawer編。「なぜ道徳について『考え、議論する』のか？――『道徳』について」（第1章、10-24頁を執筆。従来の「道徳の時間」では、自分自身の内面を見つめ、道徳に背きかねない自らの未熟な心と向き合うことが求められてきたが、今日の「特別の教科　道徳」（道徳科）では「考え、議論する」ことが求められている。いったい何について考え、議論すればよいのか、道徳を身につけることとどのような関係にあるのか、そもそも、道徳についてなぜ「考え、議論する」必要があるのか、といった問題について考察した。
2.教育哲学事典	共	2023年7月	丸善出版	教育哲学会編（今井康雄・編集委員長、小玉重夫・田中智志・松浦良充・松下良平編集幹事）の読む事典。「学ぶと教える」「師と教員」「道徳と倫理」「学力論の相剋」「法と教育」「コラム：文理融合の中の教育哲学」を執筆。全640頁。
3.デューイ著作集２　哲学２：論理学理論の研究、ほか――デモクラシー／プラグマティズム論文集	共	2022年12月28日	東京大学出版会	「未完のデューイ――ポスト〈哲学〉的世界を探し求める旅への誘い」を「解題」として執筆（vii-xx頁）。本書（古屋恵太監訳『デューイ著作集２　哲学２』）には、デューイの初期と中期の著作からデモクラシーとプラグマティズムに関する重要な論文が収められている。その思想形成過程に伴う錯綜した議論に道筋をつけるために、デューイ思想の特徴を大きく二つに分けた上で、本書のデューイ思想が現代社会に与えてくれる示唆について考えるために、三つの論点（実践者として歴史について観想する意義、参加重

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
				視の学習論や知識論を問い直す論理学＝探究論、現代科学研究とデューイ思想）を取り上げて、論じた。
4.実践につながる教育原理	共	2022年4月20日	北樹出版	「主体的な学びは教えることができるのか？――「教育」について」（第１章）を執筆。國崎大恩・藤川信夫編、8-23頁。主体的に思考し判断する力や学び続ける力が求められ、「アクティブラーニング」や「主体的・対話的で深い学び」の導入が、幼児教育から大学教育まで求められているが、教師の計画に従い、教師が工夫し配置した学習法によって身についたものを「主体的」とみなしてよいのか、という根本的な問題について考察した。伝統的な「学び・教え」と近代の「教育」「学習」を比較対照した上で、この二つの世界をどのように結びつけるのかについて論じた。
5.民主主義と教育の再創造――デューイ研究の未来へ	共	2020年12月5日	勁草書房	「来るべき教育思想へ――「経験の再構成」としての教育を再定位する」の章を執筆。日本デューイ学会編、33-42頁。ジョン・デューイ『民主主義と教育』出版百年を記念して日本デューイ学会が企画した本。担当章では、デューイの「経験の再構成」としての教育という考え方を、来たるべき教育思想として読み直した。新教育の主導者としてのデューイではなく、新教育が陥りがちであった二項対立（経験vs.知識、等々）への批判者として位置づけた上で、デューイ思想がもつ固有の意義は、今なおというより今だからこそ浮き彫りになりつつあることを指摘した。デューイの教育思想を21世紀のこれからの時代に必要な教育思想として捉え直すとき、そのときそこにはどのような可能性が秘められているのか。その可能性を開示するための手がかりとなりうる視点を、いくつか提示してみた。
6.教育哲学のデューイ――連還する二つの経験	共	2019年10月30日	東信堂	「教育と民主主義の再建のために――現代社会の危機とデューイの学習思想」の章を執筆。田中智志編、54-83頁。近代哲学批判と共鳴しつつも、その批判が陥りがちなポストモダン的懐疑論を乗り越える可能性を秘めた思想としてJ. デューイを位置づけ、デューイの教育思想がポストモダン的懐疑論をどのような形で乗り越えることができるか、その可能性について考えてみた。デューイの教育論を学習の方法論ではなく学習の思想として再定位した上で、その学習思想が、ポストモダン的懐疑論に侵食された社会における教育と民主主義の形骸化をどのようにして乗り越えていくことができるか、考察した。
7.いま、教育と教育学を問い直す――教育哲学は何を究明し、何を展望するか	共	2019年02月10日	東信堂	「国民国家と日本の教育・教育学――変容の中の展望」の章を執筆。森田尚人・松浦良充編、148-182頁。教育哲学会年次大会時の理事会企画「課題研究」では、2011～2013年は統一テーマ「これまでの教育哲学、これからの教育学」が設定されたが、その2年目（2012年）のテーマ「国家と教育」で発表した報告を全面的に改稿したもの。日本における国民国家と教育・教育学の関係の歴史的推移を構造化し、教育および教育学の変容過程を概観した上で、その歴史的過程の中に今日の教育と教育学を位置づけてみた。グローバル化に伴う国家の変容が教育と教育学にもたらす深刻な影響（教育の隆盛の裏側にある教育の貧困化）を確認した上で、未来の教育と教育学はどのような可能性に開かれているのか、考察した。
8.深い学びを紡ぎだす――教科と子どもの視点から	共	2019年01月20日	勁草書房	「『主体的・対話的で深い学び』の計り知れない困難――見失われた可能性を求めて」の章を執筆。グループ・ディダクティカ編、172-190頁。「主体的・対話的で深い学び」が抱えている困難や限界について、特にそこで前提とされている学習観に着目しながら、大きく４点（理論枠組みにある不明点／「「生きて働く」知識」の習得失敗や知識の軽視／二つの学習観（積み上げ型と螺旋型）の混在／二つの学習観における活用や探究をめぐる困難や限界）に分けて論じた。さらに、それらの困難から抜け出すための手がかりについても提示した。
9.道徳教育	共	2017年10月3日	協同出版	「第１章　道徳の思想と道徳教育　第１節　欧米の思想を中心に」（5-19頁）、「第４章　道徳教育をめぐる今日的課題　第２節　情報消費社会における道徳と道徳教育」「第４章・第３節　公共の問題について『考え、議論する』道徳」（92-115頁）を執筆。田中耕治編（高見茂・田中耕治・矢野智司・稲垣恭子監修『教職教養講座第６巻』）。第１章第１節は本書の導入部であり、道徳教育につい

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
				て考える際の出発点を築くために「道徳とは何か」という問題に迫り、道徳の多様な姿をめぐる見取り図を描いてみた。第４章第２節では、社会（産業構造）の変容と道徳の関係について考察し、とりわけ情報消費社会における道徳および道徳教育の特質と課題について論じた。さらに同第３節では、道徳科を公共の問題について「考え、議論する」道徳として位置づけ、どのような問題について、どこまで・どのように考え、議論すればよいのか、「生命尊重」を題材にして論じた。
10.現代教育の争点・論点	共	2015年4月1日	一藝社	第1章「誰のための・何のための公教育か」の章を執筆。松浦良充編、18-28頁。公教育に市場の論理を導入する動きが顕著な状況下では、「公教育のあり方が揺らいでいる中でその目的や役割をどのように再定義するか」という、歴史と社会に根ざした政治的な問いに直面している。公教育の公共性が切り詰められたことを糊塗するために公共心や愛国心の教育を説くことではなく、教育の公共性のより豊かな可能性に目を向ける必要があることについて論じた。
11.道徳教育論	共	2014年4月20日	一藝社	松下良平編。田中智志・橋本美保監修「新・教職課程シリーズ」の中の一巻。全234頁。編者として、執筆者の選定のほかに、序章、終章、まえがき等を担当した。序章では、生活の中の道徳教育と国家が要請する道徳教育（学校における道徳教育）の違いを指摘し、後者の道徳教育が抱えている問題点について解説した上で、学校における道徳教育の可能性と課題について論じた。終章では、規範教育としての道徳教育の問題点を指摘し、市民教育としての道徳教育という別の考え方を提示した。
12.教育思想史で読む現代教育	共	2013年3月25日	勁草書房	「道徳教育――ナショナリズム／教育勅語がもたらす自己否定」の章を執筆。森田尚人・森田伸子編、95-116頁。日本の学校はなぜ、戦前だけでなく今日でももっぱら自己否定の道徳を教えようとし、また受け入れてきたのだろうか。その問題を解明するために、まずナショナリズム一般と道徳教育の関係について確認した。さらに、日本のナショナリズムが教育勅語という道徳教育の立脚点を形成していく過程をふりかえることを通じて、日本の道徳教育がどのような意味の自己否定を促してきたかについて考察した。そのなかで、自己否定の道徳やその教育が日本社会で受け入れられてきた背景も明らかにした。
13.教師になること、教師であり続けること――困難の中の希望	共	2012年9月30日	勁草書房	「まじめな教師の罪と罰――教師が教師であるために必要なこと」の章を執筆。グループ・ディダクティカ編、46-67頁。自分に課せられた任務をきっちりとこなし、自分に期待される役割をしっかり果たす「まじめな教師」が、今日求められている。しかし、そのまじめさの裏側には無責任さがひそんでいる。今日なぜこのような「まじめな教師」が増えつつあるのか。そして「まじめな教師」は学校教育にどのような危機をもたらすのか。この問題について考える中で、「まじめな教師」のオルタナティヴとして「誠実な教師」という教師像を提示した。
14.教育人間学――臨床と超越	共	2012年8月30日	東京大学出版会	「人はなぜ学ぶのか――学びのエコロジーへ」の章を執筆。田中毎実編、81-106頁。「人はなぜ学ぶのか」という問いに、学習の個人主義や心理主義はうまく答えられないが、学ぶ者自身の心の外部へと抜け出て、学ぶ動機を支えている歴史的な共同体の存在を解明するだけでも不十分である。そこでここでは、学習の個人主義的・心理主義的な見方に批判的な諸理論の総合をめざしつつ、学ぶ者とその人を取り巻く世界とのかかわりの次元の解明を試みた。その結果、根源的な文化活動としての人間の学びにおいては、「人はなぜ学ぶのか」は、通説のいずれとも異なり、答えがあるのに答えられない問いとして浮上した。
15.道徳教育はホントに道徳的か？――「生きづらさ」の背景を探る	単	2011年10月25日	日本図書センター	全368頁。明治期以降の道徳教育の歴史を踏まえながら、副読本の教材分析、「道徳」授業について考察した上で、「共同体道徳」と「市場モラル」の区別を導入して、道徳教育の新しい構想を試みた。共同体道徳という支えを欠いた市場モラルの教育は道徳的とはいえないが、共同体道徳という土台の上に市場モラルを位置づけると、共同体道徳の限界が乗り越えられ、市場モラルも本来の輝きを取りもどすことを、さまざまな具体例を用いながら明らかにした。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
16.教養と学力	共	2011年06月20日	愛知教育大学出版会	「学力と教養をめぐる教育学のジレンマ――教養としての教育へ」の章を執筆。日本教育学会中部地区研究プロジェクト（豊田ひさき・子安潤・近藤孝弘・松下良平・的場正美編）、63-85頁。労働にとっての有用性を重視する「学力」と、そのような有用性から自由になろうとする「教養」。そのいずれをどのように重視するかによって、教育学の内実は大きく異なってくる。ここでは、学力と教養をめぐる教育学の対立の構造を解明し、それをめぐるジレンマを指摘した上で、その難局をどうすれば打開できるのか、その方向性を探ってみた。
17.アクセス公共学	共	2010年09月	日本経済評論社	「教育の公共性――議論の地殻変動と多元化する抗争」の章を執筆。山脇直司・押村高編、157-177頁。1970年代に萌し、90年代以降に顕著になった社会の構造的な変化は、教育の公共性をめぐる議論に大きな地殻変動をもたらしつつある。国家の変容に促されて、近年、教育の公共性をめぐる議論の枠組みがどのように変容しつつあるのか、その見取り図を描き出してみた。そのなかで、議論が再び国家の内部で活発になるとともに、教育の公共性をめぐる問題が国家や学校教育のあり方に尽きない問題として市民社会、市場、家庭の各領域で噴出し、抗争というべき鋭い対立が随所で生じていることを明らかにした。
18.公共性の政治理論	共	2010年07月	ナカニシヤ出版	「教育における公共性の再定義に向けて」の章を執筆。齋藤純一編、186-206 頁。公共性と教育についての考察は、公共性のいわば発生的な側面を浮き彫りにする。この問題について考察するための足場づくりとして、まず日本の教育界おける公共性をめぐる議論の大きな見取り図を描き出すことを試みた。最初に国家と市場において教育の公共性がどのように捉えられているかについて要約し、次に二種類の異質な市民的公共性が学校教育を舞台にしてせめぎ合っていることを指摘した。以上のことを踏まえて、公共性の発生的側面に目を向け、教育による市民的公共圏／公共性の実現可能性について考察した。
19.「学び」の認知科学事典	共	2010年02月	大修館書店	「学ぶことの二つの系譜」の章を執筆。佐伯胖監修・渡部信一編、21-38頁。現代人の常識では、学習はめざす目標を必要とする。目標の内容や性格についてはさまざまな論争があるが、めざす目標がなければ人は学べないし、学ぶ動機も得られないと考える点では、多くの人びとは一致している。しかしながら、目標を必要とする「学習」は近代西欧に誕生したものであり、歴史的・社会的には特殊なものにすぎない。一方、学ぶことには、目標を必要としない「学び」の系譜である。それは近代の「学習」よりもはるかに一般性が高いにもかかわらず、今日の学校・教育ではほとんど考慮されることがない。ここではこの二つの系譜を比較し、両者の相違と関係について考察してみた。
20.道徳の伝達――モダンとポストモダンを超えて	単	2004年2月25日	日本図書センター	全529＋ xxvi頁。博士論文に加筆修正した著作であり、道徳的規範の伝達からの撤退を説く従来の諸理論（逃走理論）と、道徳的規範の伝達の推進を訴える従来の諸理論（闘争理論）の双方を乗り越え、道徳的規範の伝達を肯定するための別の新たな理論の構築を試みた。その試みは同時に、①道徳とは何かをめぐる考察、および②教育とは何かについての考察と広く交錯する。そのため副次的ながら、この二つの問題についても一定の理論的貢献を果たした。
21.教育と政治／戦後教育を読みなおす	共	2003年09月	勁草書房	「楽しい授業・学校論の系譜学――子ども中心主義的教育理念のアイロニー」の章を執筆。森田尚人・森田伸子・今井康雄編、142-166頁。 ●再録：広田照幸監修／山内乾史・原清治編『リーディングス 日本の教育と社会・第１巻――学力問題・ゆとり教育』（日本図書センター、2006年11月、弟Ⅳ部・第16章、313-330頁）。 楽しい授業・学校論をめぐる理論枠組みを、歴史的な視点を考慮しつつ原理的に問い直すことをめざした。楽しい授業・学校論はどのような社会状況の下で、どのような理論的・実践的関心に支えられて唱えられ始めたのか、その理論を支える関心の内容は時代や社会状況の推移に伴ってどのように変化してきたのか、を明らかにした

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
				上で、楽しい授業・学校論は、今日の学校改革のための指針とはなりえず、逆にアイロニカルな帰結をもたらすことを指摘した。
22.現代デューイ思想の再評価	共	2003年06月	世界思想社	「ポストモダン社会とデューイ――経験の復権のために」の章を執筆。杉浦宏編、234-246頁。ポストモダン社会においては、デューイの理論はかなりアンビヴァレントな位置にあると考えられる。デューイの期待はこの新しい社会でこそ実現する可能性が高まるともいえるが、反対にデューイ理論とこのポストモダン社会の構造は基本的に相容れない可能性もある。この異なる二つの可能性の根拠と内実について論じた上で、それらの可能性の前でわれわれはどうすべきかについて考察した。
23.知ることの力――心情主義の道徳教育を超えて	単	2002年12月15日	勁草書房	全vii＋226頁。「してはいけないとわかっているのにやってしまう」現象（知行不一致現象）を、知行二元論や認識・情意・行為の三分法に依拠した教育方法によって解消しようとする道徳教育論（心情主義的道徳教育論）の克服を試みた。道徳原理を理解することの構造を明らかにした上で、知ることと行うことの不一致現象がなぜ生じるかについて説明し、心情主義的道徳教育論に代わる「理解を深める教育」とそれを可能にする社会的条件の再編を提案した。
24.教育評価論の歴史と現代的課題	共	2002年11月	晃洋書房	「教育的鑑識眼研究序説――自律的な学びのために」の章を執筆。天野正輝編、212-228頁。昨今の学習論で再評価され、再構築されつつある伝統的な「学び」の大きな特徴の一つは、それが教育目標をもたないことにある。そのような学びを「鑑識眼にもとづく学び」として位置づけた上で、鑑識眼のはたらきと位置づけを解明することを通じて、教育目標を必要としない学びを支えている〈鑑識眼にもとづく教育評価〉の基本的な枠組みを素描した。
25.学びのためのカリキュラム論	共	2002年09月	勁草書房	「自生する学び――動機づけを必要としないカリキュラム」の章を執筆。グループ・ディダクティカ編、236-255頁。伝統的な社会の「学び」は自生するものであるが、近代学校に採用された「学習」は動機づけがなければ生じない。「学習」とは原理的に異なる「学び」の特徴をまず明らかにした上で、「学び」においては動機づけがないにもかかわらずどのようにして学びの動機が生まれるのかという問題について考察した。さらに、「動機づけ」という考えがもつ問題点を指摘した上で、「学び」のためのカリキュラムが動機づけを必要としないことに関しても若干の提案をした。
26.日本の戦後教育とデューイ	共	1998年11月	世界思想社	「産業社会の出現と教育概念の再構成」の章を執筆。杉浦宏編、193-205頁。近代教育思想の系譜における異端の思想としてのデューイの教育思想は、近代教育の枠組みに強く縛られていた戦後日本においては、その反対者はもちろんのこと、彼の信奉者からも根本的な点で誤解されたという視点に立って、『学校と社会』および『民主主義と教育』に込められたデューイ独特の教育概念や学校論のエッセンスをまず明らかにした。そのうえで、戦後日本におけるデューイ誤解の背景と様相を描き出し、最後にデューイの教育概念がもっている独自の意義を発展させる可能性についても考察した。
27.生徒指導・進路指導	共	1997年05月	協同出版	「生徒理解の原理と課題」天野正輝編（和田修二・柴野昌山・高木英明監修）『(新・教職教養シリーズ 第５巻）』、211-233頁。生徒理解とは何かという問題に迫るために、まず他者を理解するとはどういうことかという問いが自己の捉え方と深く関わっていることを示した。そのうえで、他者理解としての生徒理解のあり方や方法について考察し、さらに他者理解のあり方は、学校では何のために生徒たちを理解しなければならないのかという問題を提出した。最後に、生徒理解の目的をめぐる問題についても考える中で、生徒理解に携わる人が今日立ち向かわなければならない課題を明らかにした。
28.アメリカ教育哲学の動向	共	1995年06月	晃洋書房	「ポストモダン教育学の倫理――ジルーとその周辺」の章を執筆。杉浦宏編、331-347頁。アメリカの教育学が、80年代半ばから90年代にかけてポストモダニズムの影響力の傘下に次第に入りつつあるとき、このポストモダニズムのアメリカ教育哲学・教育原論における近年の展開について、自覚的に政治的－倫理的観点から「ポストモダン教育学」(postmodern pedagogy)を唱えているヘンリー・ジルー

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
29.教育方法学の再構築	共	1995年03月	あゆみ出版	(Henry A. Giroux)の理論を中心に概観し、若干の考察を加えた。「知の解釈学と伝達観・学習観の転換――〈倫理的啓発〉としての教育へ」の章を執筆。稲葉宏雄編、223-244頁。近代教育学における理想でもあった伝達観・学習観の背後に隠されていた近代主義的な知識観が瓦解して、知識の性格が従来とは別様に捉え直されたとき、知識を伝達し学習することの基本様式はどのような方向に転換する必要があるか。さらにそうした伝達－学習様式の転換は、従来進歩的とされてきた啓蒙的な伝達観・学習観の抱える問題点をどのような形で浮き彫りにするか。これらの問題について考察した。
30.学びのための授業論	共	1994年03月	勁草書房	「『納得』への異議――道徳教育内容研究の観点から」の章を執筆。グループ・ディダクティカ編、99-124頁。知識伝達としての教育において、学習者による知識の一方的受容ではなく「納得」が必要なのは、知識そのものよりも学習者の利益・観点を尊重するからではなく、知識の本性が学習者の「納得」を必然的に要求するからである。そのような観点から見れば、教育内容として選択された知識そのものについての研究を無視ないし軽視して「納得」をめざすとき、その教育的意義は場合によっては否定的なものにならざるをえないことを明らかにした。
31.デューイ研究の現在	共	1993年09月	日本教育研究センター	「ポスト近代的理性としての〈科学〉的知性――デューイ理論における目的合理性批判の契機」の章を執筆。杉浦宏編、247-264頁。科学技術の飛躍的発展と科学主義＝実証主義的思想の抬頭という時流の中で、晩年に至るまで自ら「科学」への積極的信頼を表明し続け、「科学の方法」を人間の成長と社会の改革の基礎に置いたデューイの信奉する〈科学〉的知性は、実態としては、支配や抑圧と結びついた権力的な理性と慎重に区別されている。そのことを明らかにするために、近代的理性の代表として「目的合理性」をとりあげ、デューイのいう〈科学〉的知性がこの目的合理性と一方では交錯しつつも、他方でそれをどのようにして斥けようとしていたのか、その一端をデューイ自身の主張に沿いながら解明した。
32.基礎からの道徳教育	共	1986年06月	福村出版	「現代の倫理思想と道徳教育――英米系の哲学の観点から」の章を執筆。稲葉宏雄編、93-106頁。現代英米の倫理思想と道徳教育論の関係について、まず、日常言語学派が対話の普遍的な拘束を解明している点で道徳判断の合理的方法の解明に積極的な貢献をすることを指摘し、次のそのような哲学的理論が道徳教育論に具体的にどのような貢献をするかについて、道徳教育のめざすべき人間像、道徳教育の目標の明確化に関して明らかにした。
2 学位論文				
1.道徳的規範の伝達へのプラグマティズム的－解釈学的アプローチ――モダンとポストモダンを超えて	単	2002年1月23日	京都大学	学位記番号 論教博第98号／報告番号 乙第10836号。道徳的規範の伝達からの撤退を説く従来の諸理論（逃走理論）と、道徳的規範の伝達の推進を訴える従来の諸理論（闘争理論）の双方を乗り越え、道徳的規範の伝達を肯定するための別の新たな理論の構築を試みた。その試みは同時に、①道徳とは何かをめぐる考察、および②教育とは何かについての考察と広く交錯する。そのため副次的ながら、この二つの問題についても一定の理論的貢献を果たした。
3 学術論文				
1.公教育としての道徳教育に期待すること――何について「考え、議論する」のか	単	2023年9月	日本道徳教育方法学会『道徳教育論叢』第１号（道徳教育における理論と実践）、70-80頁。	日本道徳教育方法学会オンラインセミナーWinter 2022（2022. 2. 23）での報告をまとめた論文。公教育としての道徳科の本質はどこにあるのか、道徳科では道徳をめぐって何について考え、議論すればよいのか、に焦点を当てながら、道徳の理念と道徳科の論理や道徳教育の方法とをいかにつなぐかという問題について考察した。上地完治（81-90頁）と藤井佳世（91-100頁）のコメント論文付き。
2.学校・教育を問い直し、教育の魅力を再発見する	単	2023年3月1日	『教育と医学』第815号、2023年3&4月号、4-10頁。	「教育・教師の魅力を考える」特集号に寄稿。教職の「ブラック化」に抗し、教育の魅力を再発見するための手がかりを得るために、教育を人類史や近代史の大きな歴史の流れの中に位置づけて、教育の原点や本義を探ることを試みた。資質・能力を「教育」することが様々な問題を抱えていることを指摘した上で、人類史的に普遍的な学びという土台の上に、本来の役割に限定した近代教育を結びつけると教育の魅力の再発見につながることについて論じた。
3.Toward an	単	2022年6月	Web: Educational	近代の教育は社会問題の解決を期待されながら、むしろ問題を新た

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
ecological view of learning: Cultivating learners in a data-driven society		29日	Philosophy and Theory, pp. 1-10. Taylor & Francis, Published online : https://doi.org/10.1080/00131857.2022.2094242 Journal: Educational Philosophy and Theory, 56 (2): 116-125 (2024)	に生み出している。その教育への理論的批判は必ずしも成功していない一方で、データ駆動社会の出現により歴史的産物としての教育は実際には効力を失いつつある。知識やスキルの獲得がが不要になったわけではない。公教育の目的や役割の転回の不可避を踏まえて、教育の大胆な問い直しが迫られているのである。ここでは教育観の転換のための手がかりとなりうるものをエコロジカルな学習観と呼び、日本の「学び」論からも学びながら、近代教育に代わるものを探った。
4.Philosophical Reflections on Modern Education in Japan: Strategies and Prospects	共	2021年12月28日	Educational Philosophy and Theory, pp. 1-17. Routledge, Published Online : https://doi.org/10.1080/00131857.2021.2017884	Morimichi Kato, Ryohei Matsushita, Masamichi Ueno, Kayo Fujii, Yasunori Kashiwagi, Naoko Saito, Tomohiro Akiyama, Fumio Ono, Mika Okabe, JunYamana, Shigeki Izawa, Yasushi Maruyama, Miyuki Okamura, Ruyu Hung & Duck-Joo Kwak の共著。☞sect.1: Toward an Ecological View of Learning: Cultivating Learners in a Data-Driven Society
5.教育と人間の変容の中の教育学教育――「育てる」教育のために大学に何ができるか	単	2020年8月31日	『関西教育学会年報』第44号、197-201頁。	関西教育学会・公開シンポジウム「〈人を育てる人〉を育てる――いま、改めて大学における教育学教育の意味を考える（2019年11月16日＠関西学院大学）における発表内容を原稿化したもの。人を育てることを「〈環境世界と対話する人〉と対話すること」とみなした上で、「『人を育てる人』を育てる」ことについて考察した。さらに、「育てる」教育が蝕まれつつある事態およびその背景を踏まえたながら、「育てる」教育を促すための教育学教育について提言した。
6.Philosophy of Education in a New Key: Voices from Japan	共	2020年8月16日	Educational Philosophy and Theory, Routledge, Published online	Morimichi Kato, Naoko Saito, Masamichi Ueno, Shigeki Izawa, Yasushi Maruyama, Hirotaka Sugita, Fumio Ono, Reiko Muroi, Yasuko Miyazaki, Jun Yamana, Michael A. Peters & Marek Tesar の共著。Educational Philosophy and Theory誌で展開中の、PESA (Philosophy of Education Society of Australasia)による collective project企画の日本編。sect.2: Toward a shift in our way of living and learningを執筆。コロナ後の世界において対話を可能にするためには、自己の存在論的な問い直しが必要であり、自己とそれを取り巻く世界が相互浸透的になったとき、新たな学びの可能性が開かれることについて論じた。
7.二一世紀における教育観の転換――直進の文明と逍遙の文化の対立を調停する	単	2020年05月10日	『教育哲学研究』第121号、112-137頁。	20世紀末から今日にかけて日本の学校教育や大学教育に変革を迫られているが、それはグローバルな教育政策とも軌を一にしている。それらの教育諸政策を支える根源的な理念や原理について、新自由主義の理念に尽きないものを探究した。そのさい、当の教育諸政策や学校・大学の改革をめぐる混乱や論争の背後にどのような哲学的対立が潜んでいるのか、仮説的見方を提案することを試みた。文明や文化といった大きなレベルの議論に目を向け、「直進の文明」と「逍遙の文化」の対立について説明した上で、その対立が教育観の深刻な対立をも引き起こしていることを指摘した。そこからは、今日の教育をめぐる様々な混乱や論争の意味を理解し、議論の帰趨を見通すための手がかりが得られると考えられる。
8.道徳を再発見する教科へ――アンラーン(unlearn)という課題		2019年08月31日	『九州教育学会研究紀要』第46巻、21-29頁。	九州教育学会70回大会・総合部会＜「特別の教科　道徳」という不安／希望――「考え、議論する道徳」の行方＞（2018年11月17日＠南九州大学・都城キャンパス）の発表原稿を加筆修正したもの。現代日本社会では〈道徳の軽視や矮小化〉という現象が広く見られるために、その現象からの「道徳の復権」が喫緊の課題であることをまず論じた。一方、「道徳の復権」がなされない限り、多様な道徳

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				観の対立を調停するための「考え、議論する道徳」は困難である。ここにおいて道徳のアンラーン（学び直し・学びほぐし）という教育的課題が浮上する。自らが当たり前と考えている狭隘な道徳観を一旦宙づりにして、人類の歴史的遺産としての基本的な諸道徳を改めて発見するという課題である。「特別の教科　道徳」においては、このような形で「道徳の復権」から始める必要があることを指摘した。
9.Education Without Consideration of Human Inquiry: Flaws in Arguments on Competencies	単	2019年08月30日	English E-Journal of the Philosophy of Education, Vol. 4, 2019, pp. 40-48.	「虚空に漂う教育――人間不在の「資質・能力」論の陥穽」（『教育哲学研究』第119号、2019年）を若干の加筆修正の上で英訳したもの。
10.虚空に漂う教育――人間不在の「資質・能力」論の陥穽	単	2019年05月10日	『教育哲学研究』第119号、13-18頁。	教育哲学会第61回大会「研究討議」＜「資質・能力」を哲学する＞（2018年10月6日@山梨学院短期大学）の発表原稿を要約したもの。今日「資質・能力の三つの柱」が教育の目標に掲げられているが、「資質・能力」論は多くの深刻な問題を抱えている。そのうちここでは、最も本質的と考えられ、かつ特に哲学的議論と関係のある問題に絞って考察した。認知や思考を個人の内部にある心や脳の働きに還元する考え方を批判し、行為・知覚・思考を一体のものとして捉える新しい科学的－哲学的な流れに沿う形で、思考・探究や学習について別の見方を提示したが、それが正しければ、「資質・能力」論に基づく教育は致命的な限界や欠陥を抱えている可能性があることを指摘した。
11.道徳教育とアクティブラーニング――デューイから何を学ぶか	単	2017年10月01日	『日本デューイ学会紀要』第58号、177-187頁。	アクティブラーニング型授業への転換をめぐって、デューイから何を学べばよいのかについて考察した。第一に、デューイによる道徳授業批判を承けて、デューイの理論枠から示唆される別種の道徳授業の可能性を探り、そのような道徳授業への授業観の転換を促すための仕掛けとしてアクティブラーニングを位置づけてみた。第二は、アクティブラーニングの問題点を指摘することであり、デューイが重視していたにもかかわらず、今日のアクティブラーニング論が無視しがちな（とりわけ道徳教育に関係する）論点を浮き彫りにした。
12.道徳科の可能性と課題――「考え、議論する」道徳の再定義に向けて	単	2017年10月	『「特別の教科 道徳」への対応を検討する（日本教育方法学会第20回研究集会報告書）』、4-21頁。	既存の「特別の教科　道徳」の制度的枠組みを前提にして、道徳科教育を滞りなく実行しようとする立場、および修身科の復活を恐れて道徳科反対に終始したり、嫌々ながら妥協策や懐柔策を考えたりする立場のいずれにも与することなく、いわば突貫工事によってかろうじて立ち上がった道徳科を、よりよき・まともな道徳科へと転換するための基礎作業を試みてみた。学校における「道徳」の意味や役割を原理的に問い直し、「考え、議論する道徳」としての道徳科の再定義を提案した上で、道徳科の学習指導要領、教科書、評価等のあり方について再検討する方向性を提示した。
13.The Paradox of Evidence-based Education: From the Decline of Education to Abandonment of the Theories of Education	単	2017年03月	Educational Studies in Japan : International Yearbook, Japanese Educational Research Association, No. 11, pp. 101-119.	松下良平「エビデンスに基づく教育の逆説――教育の失調から教育学の廃棄へ」『教育学研究』（第82巻2号、2015年6月30日、16-29頁）を、外国人向けに若干加筆修正した上で英訳した論文。『教育学研究』編集委員会により同誌掲載論文の中から選定され、Nadezhda Murray氏に英訳が依頼された（ただし　wordingについての責任は著者自身にある）。
14.学習思想史の中のアクティブラーニング――能動と受動のもつれを解きほぐす	単	2016年09月10日	『近代教育フォーラム』第25号、1-15頁。	アリストテレス由来の〈魂による学び〉とデカルト由来の〈心による学習〉という学習観の枠組みを設定し、特に「能動」と「受動」の関係に焦点を当てて、アクティブラーニングの問題点について考察した。アクティブラーニングは思考の活性化をめざすが、考察の結果に従えば、〈心による学習〉と結びつく場合には失敗が避けられない。主体的・能動的な思考を促すために必要なのは、アクティブラーニングという学習方法というより、むしろ「魂の受動」に立脚した〈魂による学び〉への学習観の転換なのである。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
15.主権者教育の目的と課題――生活指導と道徳教育の協働のための一つの試み	単	2016年08月20日	『生活指導研究』第33号、1-10頁。	道徳教育と生活指導がそれぞれの過去を乗り越え、教育のあり方について大枠を共有できるようになれば、両者は相互浸透的に協働しつつ、それぞれ固有の意義を発揮して互いに補い合うようになると考えられる。本論文では、その可能性を具体的に探るために、主権者教育を題材にして、道徳教育と生活指導はどのような意味で相互浸透し、相互補完的になりうるかについて考察した。
16.オーセンティックな道徳教育へ――道徳・倫理の多様性と学校教育	単	2016年03月	『道徳性発達研究』第10巻第1号、1-11頁。	日本道徳性発達実践学会大会時の「基調講演」（2014年12月6日・立命館大学）を再構成した論文。「特別の教科　道徳」においては、「道徳とは何か」という問いの探究が重要になる。その前提に立って、学問的な吟味を経た多様な道徳観や倫理観を包摂し調停する立場からなされる道徳教育をオーセンティックな道徳教育と呼び、その基本原理や今日的意義について論じた。そのうえで、多様な道徳観・倫理観を調停する試みの一つとして、学校教育における道徳教育の支柱となってきたリベラリズムの道徳に、ケアの倫理をどのように関係づければよいかについても考察した。
17.道徳教育と『道徳』教科化をめぐる課題と展望――障害者のエンパワメントに向けて	単	2015年11月25日	『障害者問題研究』第43巻3号、234-239頁。	道徳科導入を道徳教育の捉え直しの機会として位置づけた上で、道徳科教育を含む道徳教育を希望のあるものに刷新していくとはどういうことか、そのために何を考える必要があるか、について提案し、障害者（児）をエンパワーするという観点から、道徳教育や道徳科の今後の展望を描いてみた。
18.道徳科構成原理論 Ver1.0	単	2015年11月10日	『教育哲学研究』第112号、16-34頁。	道徳科が道徳教育の積極的な可能性を新たに開示することをめざして、道徳科の構成原理（基本理念や実践の基底的原理）を提案した。公教育としての学校教育において道徳科の教育はどのようにすれば正当化できるのか、という問いを追究する中で、道徳科がめざすべきものは何か、そこにはどのような意義があるのか、について一定の方向性を示した。
19.道徳教育の思想と政治をめぐる三つの断章	単	2015年09月12日	『近代教育フォーラム』第24号、84-87頁。	教育思想史学会大会2014年度シンポジウム１「社会の構想と道徳教育の思想」の企画と司会を担当した者による「司会コメント」。登壇者であった岩下誠氏、森田伸子氏、貝塚茂樹氏の各報告論文について解題を兼ねたコメントを付し、併せて3つの論文を関連づけながら本シンポジウムの意義と残された課題について論じた。
20.エビデンスに基づく教育の逆説――教育の失調から教育学の廃棄へ	単	2015年06月30日	『教育学研究』第82巻2号、16-29頁。	エビデンスに基づく教育は、一まとまりの意味システムとして特有の政治的機能を果たす。そのためその教育への批判は、その理論的前提への内在的批判とともに、その実行が再帰的に社会にもたらすものに目を向ける必要がある。教育観の変容を経て成立可能になったエビデンスに基づく教育は、それを要求してきた固有の歴史的・社会的文脈ゆえに教育を変質させ、教育の形骸化や空洞化をもたらし、教育学を廃棄に追い込んでいく可能性があることを指摘した。
21.道徳教科化にどう向き合うか	単	2015年05月1日	『教育』No.832、58-65頁。	道徳教科化に対する不安や懸念が高まる中、これにどう対応すればよいのか。道徳教育の基本型は生活を通じた道徳教育にあることを述べた上で、学校における修身科以来の道徳教育の歴史を踏まえて、道徳教科化に対して警戒すべき点を指摘した。その一方で、20世紀末より顕著になった社会の変化をふまえて、教科化を積極的に活用する可能性についても論じた。
22.道徳教科化と国民国家をめぐる政治学――いずれのシナリオを選ぶのか	単	2015年04月1日	『現代思想』第43巻第8号、169-183頁。	安倍政権による「戦後レジームからの脱却」をめざした政策の一環である道徳教科化は、国民国家の政治学というコンテクストの中に位置づけるとき、2つの可能性に開かれていることを論じた。ひとつは国民固化の解体を安全安心に進めるための道徳教育であり、この場合の道徳教育は戦前の修身教育とも異質な「超道徳教育」になる。もうひとつは国民国家の亀裂を修復するための道徳教育であり、そのためには政治と教育の転換が必要になる。最後に、いずれを選ぶかは国民委ねられていることを指摘した。
23.ホームの再定義と生き方の転換――家庭科教育再考のガイドとしての道徳・倫理	単	2014年11月1日	『日本家庭科教育学会誌』第57巻3号、141-151頁。	日本家庭科教育学会第57回大会（2014年6月）での基調講演を論文化したものである。家庭科教育は道徳教育としての側面をもっていることを最初に確認した上で、家庭科教育が依拠している道徳・倫理について問い直すことによって、家庭科教育の意義や位置はどのように変わるのかについて考察した。リベラリズムとケア論のいずれの道徳・倫理を導き(ガイド)とするかによって家庭科教育のあり方は大きく変わる。上記ふたつの道徳・倫理を調停するとき、再定義

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				されたホーム概念に基づく家庭科教育は、生き方の転換を迫ることを指摘した。
24.理念や理論を必要としない教員養成――教育思想史研究に何ができるか	単	2014年10月11日	『近代教育フォーラム』第23号、187-196頁。	教育思想史学会大会2013年度シンポジウム「教員養成と教育思想史の関係」の司会論文。両者の関係を問い直すというテーマを、教員養成をめぐる近年の変化の歴史的な意味を問うという課題の中に位置づけてみた。各々の報告者による「教員養成の思想史」から導き出される主張や「教育思想史の教育」に関する提言は、教員養成の今日起こりつつある変化に照らしてどこまで妥当するのかという問題について考察し、別の見方も提示してみた。その中で、教員養成について教育思想史研究ができることは何かについても論じた。
25.ケア論の盲点としての自由の問題――デューイとノディングズの隔たり	単	2014年10月01日	『日本デューイ学会紀要』第55号、177-187頁。	日本デューイ学会大会（2013年9月）における「課題研究」（テーマ：デューイとケア論)での報告を論文化したもの。ケア論は時代の趨勢に批判的な側面と適応的な側面をもつが、そのせいでその内部に分裂や対立をはらみ、自己矛盾や自家撞着に陥って難点や弱点をさらけだす可能性がある。本稿ではその難点や弱点が何であるかを解明することを目的としたが、そのさい自由の問題に焦点を当て、主にデューイとノディングズの思想の比較に拠りながら、ケア論の盲点ともいうべきものを明らかにした。
26.学校改革の理念と現実の間に何があるのか――サバイバル・システムを問う	単	2014年08月22日	日本教育学会中部地区研究会実行委委員会編『学校改革の理念と現実のギャップを問う――実態・背景・課題』1-15頁。	日本教育学会中部地区理事主催のシンポジウムでの「趣旨説明」を論文化したもの。今日、理念としては、主体的な学びや主体的な社会参画などアクティブな能力や態度の形成がめざされている一方で、教育現場では、目標とする教育成果を確実に達成し、失敗のリスクをマネジメントするために、さまざまな統制・管理システムが導入され、標準化や画一化が志向されている。理念と現実のこのギャップをもたらしているものを「サバイバル・システム」と名づけ、その特徴・背景や帰結について考察するとともに、それをどう問い直すかについても論じた。
27.教育の因果モデルと呼応モデル――教えることの諸相	単	2014年05月10日	『教育哲学研究』第105号、8-13頁。	近代の教育の土台が大きく揺らいでいく時代には、従来とは別様の教育が浮上してくる可能性がある。その別様の教育において「教えること」はどういう形をとるのだろうか。近代教育における「教え」が依拠する「因果モデル」と比較しながら、別用の教育が従う「呼応モデル」における教えることの特徴を解明し、それをさらに３つの類型に分けて考察した。
28.道徳教育と生活指導をつなぐ――どのような道徳に立脚するのか	単	2014年03月01日	『高校生活指導』第197号、104-111頁。	国家による「道徳教育」vs.国民・子どもの側に立つ「生活指導」という旧来の対立図式から自由になり、「道徳とは何か」を虚心坦懐に問うことができれば、「道徳教育」派と「生活指導」派は手を携えて、未知の問題に道徳的に対応できる人間を育んでいくことができる。リベラリズムの肯定的な側面を継承しつつも、その否定的な側面を克服しようとする道徳・倫理に依拠した道徳教育と、55年体制という特殊な枠組みから解放された生活指導は、どのような方向性で連携する必要があるかについて論じた。
29.NCLB法的な思考の威力と陥穽――教育の「正論」を問いなおす	単	2013年10月01日	『日本デューイ学会紀要』第54号、157-167頁。	「どの子も置き去りにしない・落ちこぼれにしない」点では、NCLB法は70年代日本の教育運動がめざしたものと一見似ている。NCLB法を支えている教育論とはどのようなものか。それは近年なぜアメリカや日本で公式に受け入れられるようになったのか。そこにはどのような問題点があるのか。その問題点を克服し、人間の全体的な「成長」への関心を取りもどすには何が必要なのか。これらの問題について考察した。
30.岐路に立つ道徳教育――グローバル化がもたらす悲劇と希望	単	2013年10月01日	『教育と医学』第724号、68-75頁。	●再録：貝塚茂樹監修・解説『日本道徳教育論争史 第III期――戦後道徳教育の停滞と再生　第15巻「心のノート」と道徳の「教科化」論争』日本図書センター、2015年1月。 いわゆる55年体制下では道徳教育をめぐって反対派と推進派がしばしば対立したが、グローバル化が進み、国家の位置や役割が大きくゆらいで、55年体制がリアリティを失うようになると、道徳教育をめぐる従来の対立図式もまた根本から再考を迫られている。そのとき道徳教育に関してどのような展望が開けてくるのか。リベラリズムに対抗する多様な道徳・倫理を踏まえ、市民教育とも結びついた「もう一つの道徳教育」の可能性について論じた。
31.国民国家という磁場	単	2013年05月	『教育哲学研究』	国民国家が求める国民教育としての学校教育制度が要請した日本の

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
の中の日本の教育学――教育学の四つのフェイズ		10日	第103号、36-41頁。	教育学は、国民国家という存在に強く制約されており、国家との関係の取り方、および国民国家の変容の中でその相貌や実態を変えていく。日本の教育学の誕生・展開の過程や局面を四つのフェイズとして区分した上で、近年の国民国家のゆらぎに伴い教育学が今後どのように変容していくか、その可能性について考察した。
32.教育学のカノンとしてのデューイとはだれのことか	単	2012年10月13日	『近代教育フォーラム』第21号、196-199頁。	コロキウム「教育学のカノンとしてのデューイ：過去・現在・そして未来へ」（教育思想史学会大会、2012年）での報告をまとめた論文。デューイの思想の固有の意義とその理解の困難を指摘した上で、デューイ思想の今日的意義を浮き彫りにするために、全体論の観点から教育を捉えなおし、近代教育に随伴する還元論の発想を乗り越えようとした思想家としてデューイを位置づけることを提案した。
33.公教育を再定義する――公共的市民の育成をめぐる理念と現実	単	2012年04月01日	『現代思想』第40巻第5号、110-127頁。	これからの日本社会は、公共的な問題について公共圏で思考し行動する市民としての公共的市民を必要とするようになる。ところが、道徳教育を市民教育へと拡張することが迫られている時代に、公教育機関としての今日の学校ではその課題の達成を妨げる力が従来にも増して勢いを強めている。課題と現実のこのギャップをどのように受けとめればよいのかという問題について考察した。
34.悪と出会うことがもたらす成長――「ルールと私」の世界の外へ	単	2011年07月	『発達』第32巻第127号、70-77頁。	ルール遵守と自己管理をきびしく迫る社会は、子どもたちの心に大きな負荷を与えると同時に、多様な人びとがそれぞれの生活や生育史を背負いながら共存している公共世界を見失わせがちになる。この公共世界を開示するはたらきをもつのが「悪」である。子どもが道徳的に成長していくためには、悪の排除というよりも、むしろ悪と向き合い、公共世界で悪を飼い慣らしていく経験が必要であることを指摘した。
35.新教育の彼方へ――学ぶこと・教えることの新たなヴィジョンに向けて	単	2010年10月20日	近代教育思想史学会『教育思想史コメンタール』（『近代教育フォーラム』別冊）、139-152頁。	新教育の思想の中に「教育的価値」を見いだそうとする従来の教育思想史研究を批判する教育思想史研究は、「学ぶ・教えるとはどういうことか」について、新教育の歴史的遺産に依拠する従来の思想史研究と異なり、明確な答えをもっていない。新教育からその“肯定的”遺産を救出しようとする思想史研究の問題点を改めて確認するとともに、新教育が直面した問題を引き継いで、「学ぶこと・教えること」の新たなヴィジョンの可能性を探ってみた。
36.形而上学の可能性――デューイとライプニッツのもう一つのつながり	単	2010年09月19日	『近代教育フォーラム』第19号、73-82頁。	古屋恵太氏によるフォーラム報告論文へのコメント論文。フィルムのポジをネガにするかのように古屋論文を反転させ、形而上学を徹底的に批判したポストモダン的思潮の中で受け入れられたデューイが、本質主義や「存在－神－論」には与しない形而上学の構築を最期まで試みたことに注目した。そのうえで、ライプニッツとも関連づけながらデューイの形而上学の現代的意義について考察し、さらには形而上学の自然主義化の試みを田中智志による自然の再宗教化の試みと比較してみた。
37.民主主義の危機と教育	単	2010年03月31日	『武蔵野大学政治経済研究所年報』第2号、181-215頁。	民主主義の危機を克服するために一定の教育を行ったとしても、予期に反して当初の意図や目的に背く事態がもたらされる可能性があることを前提に、教育による民主主義の危機の克服の可能性について考察した。まず民主主義の危機の中身について説明し、次に〈教育〉が民主主義の危機を下支えしていることを確認した。以上の考察から、民主主義の危機を克服するためには教育観の転換が必要であり、それは同時に根源的な民主主義を要請することでもあるとする結論を導き出した。
38.学校教育という政治的プロジェクトと教育哲学	単	2009年11月10日	『教育哲学研究100号記念特別号――教育哲学研究の現在・過去・未来』、158-173頁。	教育の豊かな可能性を探究するためには、教育哲学は学校教育という制約や学校教育と深く結びついた教育学という制約を超えていかなければならないが、他方で学校教育という制約を無視すると教育哲学という学問の存立が危うくなる。このダブルバインドが自覚されるようになる教育学の歴史を踏まえた上で、学校教育をめぐって教育哲学が今後担うべき役割について、その骨格をいくつか提案した。
39.文化衰退の時代における教育のゆくえ	単	2009年05月10日	『教育哲学研究』第99号、9-14頁。	文化と教育は概念の上で深く結びついている。文化がその固有の意味を失い、文明と混同され、自然と対置される人間的活動の所産以上のものではなくなるとき、教育の意味や内実もまた変質し、教育は大きな困難を抱えることになる。現代をそのような意味での文化

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				衰退の時代として位置づけ、そこでは教育の空洞化が広がっていくことを指摘した上で、それを克服するための手がかりについても考えてみた。
40.リキッド・モダンな消費社会における教育の迷走――文化と消費の抗争	単	2009年04月01日	『現代思想』第37巻第4号、114-142頁。	学校教育をめぐる疲弊や混乱といった状況がどのようにして生まれたのか、その背景に何があるのか、という問題について考察した上で、その問題の核心部を近代の教育＝エデュケーションという概念に支配された学校教育の思考枠組みに求め、さらには「文化」という概念を手がかりにこのような閉塞状況を突破する可能性について模索した。
41.生の土台を培う教育へ――効果的な方法の追求は教育に進歩をもたらすか	単	2008年11月	『教育と医学』第56巻第11号、13-20頁。	新しい教育スタイルの追求が効果的な教育方法の開発を意味するとき、教育は進歩するのではなく、むしろさまざまな問題を抱え込むことになる。どのような問題なのかを確認した上で、今最も必要な教育スタイルとは、都合よく使い捨てにされることのない教育、つまり目先の新しさに振り回されることなく、人が生きる上で基本的に必要なことに腰を据えて関与する教育であることを論じた。
42.道徳教育の貧困――「よく生きる」ことはどこへ？	単	2008年03月10日	『人間と教育』第57号、53-60頁。	●再録：竹内常一ほか『２００８年版 学習指導要領を読む視点』白澤社、2008年8月20日、139-150頁。 新学習指導要領の道徳教育をめぐり、「規範意識」の強調、「道徳」の教科化、奉仕体験活動と「新しい公共」という三つのトピックスを取り上げて、その背景やねらいについて論じた。そのうえで、道徳的な観点から「生きる力」の教育の問題点を指摘し、「生きる力」の教育と「よく生きる」ための道徳教育を統合するための教育の探究の必要性を提言した。
43.日本におけるデューイの受容――希望と困難のアイロニカルな交錯	単	2007年10月01日	『日本デューイ学会紀要』第48号、227-238頁。	デューイの教育思想と日本社会の関係を解明すべく、①デューイ固有の思想とデューイ的な思想という区別という視点と、②デューイ自身が格闘した社会的・思想的コンテクストと、日本でデューイが受容された社会的・思想的コンテクストの間の隔たりという視点を導入した。この二つの視点を重ね合わせることによって、日本におけるデューイ受容の特徴を浮き彫りにした。
44.公共性と倫理の基礎としての教室のコミュニケーション――民主主義の存在論的基盤の回復のために	単	2007年03月	日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究(プロジェクト・リーダー・佐藤学)『グローバル化時代における市民性の教育――論文集(1)』29-44頁。	市民性や公共性・倫理の中身をめぐって論争や対話を可能にするための土台を「民主主義の存在論的基盤」と呼び、それが子どもたちのあいだ衰弱しつつあるとはどういうことかについてまず説明した。そのうえで、教室のコミュニケーションのあり方に焦点を当てて、今日の学校で民主主義の存在論的基盤がどのように損なわれつつあるのかを明らかにした。最後に、公共性と倫理の教育にはその基礎として民主主義の存在論的基盤の回復と活性化が必要であることを指摘した上で、そのために学校では何ができるかについて考察した。
45.情報消費社会におけるデューイ教育思想のパラドクス	単	2006年10月01日	『日本デューイ学会紀要』第47号、211-219頁。	デューイ教育思想を二つに区別し、今日の情報消費社会においては、子ども中心主義の観点から理解されたデューイの思想を説くことは、デューイ固有の思想を駆逐しかねないことを明らかにした。さらに、この二つのデューイ教育思想の対立を踏まえて、彼固有の教育思想の方を活性化できたとしても、情報消費社会の文脈では皮肉にもその帰結は彼の民主主義の理想に背く可能性があることも指摘した。
46.まじめな教師の逆説――教師の困難はなぜ増殖していくのか	単	2006年03月25日	平成16～17年度科学研究費・研究成果報告書・基盤研究(Ｂ)(1)・研究課題番号16330176（研究代表・森脇健夫）『ライフヒストリー的アプローチを活かした総合的な教師の力量の研究――新たな教員養成プログラムの開発を見据え	教師の力量についてのライフヒストリー的研究を踏まえながら、石川県の小学校教師・寺岸和光氏による教育実践の固有の特徴と意義を、寺岸自身の「声」（インタビューあるいは学級通信・指導方針・指導案などに書かれたもの）、さらには子どもたちの「声」をも踏まえながら解明した。その際、寺岸氏の授業を見るだけではなかなか見えてこないが、彼の実践を根底で支えている彼の教育哲学・理念に焦点を当てた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
			て』、148-179頁。	
47.表象の学習／生としての学び	単	2005年09月18日	『近代教育フォーラム』第14号、49-62頁。	近代に特有の学習とその代替となる学習を、「表象の学習」と「生としての学び」として区別した上で、当初大きな希望を伴っていた「表象の学習」が今日、喜劇的にして悲劇的なものへと転じていることを明らかにした。さらに、「生としての学び」を「表象の学習」に取って代わるものにするために、学習の因果性に焦点を当てて「生としての学び」論の再構成を試みた。
48.道徳からの逃走、氾濫する〈規範〉	単	2005年05月10日	『教育哲学研究』第91号、35-40頁。	今日の社会で、価値の多様化や多元化が進む一方、価値の画一化や均質化が目立ってきているのはなぜか。規範の相対化やその正当化の放棄・断念が広く受け入れられている反面、規範の遵守を求める声が大きくなっているのはなぜか。これらの疑問を解き明かすために、道徳的・社会的規範を二種類（道徳と〈規範〉）に区別し、それらの表面的な類似の裏側にひそむ深い断層に目を向けた上で、教育や道徳教育がこの規範の分裂にどのように対応すべきかについて考察した。
49.「Liberal arts の Learning」は「教育」を反転させることができるか	単	2004年09月	『近代教育フォーラム』第13号、75-84頁。	松浦良充氏の「Learning の思想史」論に対するコメント論文。「教育」に回収されない Liberal arts をめぐる知的営為を「学習」でも「学び」でもなくあえて「Learning」と呼び、「『教育』を反転させる概念装置」として位置づけようとする氏の試みはどこまで成功しているのか、そのような「Learning」から「教育思想史のオルタナティヴ」としての「Learning の思想史」を構想する試みをどのように評価すればいいのか、について論じた。
50.「学び」論の抗争――類型と課題	単	2004年03月30日	『教育学年報10――教育学の最前線』、375-393頁。	藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編（世織書房）の年刊論文集。今日のさまざまな学び論を、その各々が要請されてくる知的・社会的な背景の差異を浮き彫りにすることによって、５つの類型に分類し、それぞれの類型間の親和性と対立点を明らかにした。さらに、差異や多様性の尊重などを理由にしてそれらの対立を放置するのではなく、それぞれの学び論の問題点を確認することによって、よりよき学びの可能性を追究した。
51.〈育ちの場〉の哲学と技	単	2004年03月21日	平成14～15年度科学研究費・研究成果報告書・基盤研究(C)(1)・研究課題番号14580283（研究代表・森脇健夫）『教師の力量形成へのライフヒストリー的アプローチ――授業スタイルにかかわる教師の実践的知識を中心に』58-72頁。	第３章「寺岸和光の教育実践を読み解く」の第Ｉ節。教師の力量形成へのライフヒストリー的アプローチを踏まえつつ、「まじめな教師」の特徴とそれが求められる一般的な社会的背景について説明した上で、「まじめな教師」であることが、人を育てるさいに考慮すべきいくつかの重要な教育の原則や視点を無視したり損なったりするという逆説、それゆえ皮肉なことに、今日のより本質的な教育の課題に対応できなくなるという逆説について考察した。
52.リベラリズム批判の中の『リベラリズムの教育哲学』	単	2002年12月04日	『近代教育フォーラム』第11号、167-169頁。	宮寺晃夫氏の『リベラリズムの教育哲学――多様性と選択』（勁草書房、2000年）をめぐるコロキウム（教育思想史学会、2002年）の報告論文。宮寺氏は、自由志向から平等志向に至るあらゆる種類の個人主義的リベラリズムに対する批判に対して、リベラリズムを擁護する立場から批判に応答しようと試みる。一方、本稿では、それとは異なる角度からリベラリズムを再生させる可能性について論じた。
53.学力論の言語と視線――情報消費社会の中での破綻	単	2002年05月10日	『教育哲学研究』第85号、20-25頁。	●再録：山内乾史・原清治編『論集 日本の学力問題（上巻）――学力論の変遷』日本図書センター、2010年5月、Part3。 学力をめぐるさまざまな議論が拠って立つ枠組み（学力を「私財兼国家財」とみなす学力論の概念枠）それ自身が中立的ではなく、むしろ倫理的・政治的に明白に偏向していることを示すとともに、今日の新しい社会状況（情報消費社会）の中でその枠組みが限界をあらわにしつつあることを指摘した。つまり、新旧いずれの学力観によっても「学習からの逃走」を防ぐことは困難ということである。
54.排除と再組み込み―	単	2001年09月	『近代教育フォー	教育学における臨床知の歴史を、生活や仕事の中での学び－教えの

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
―教育学における「臨床知」発見の両義性		14日	ラム』第10号、143-155頁。	中に埋め込まれていた臨床知を排除しながら、それを改めて発見し、教育学の中に組み込もうとする歴史として捉えた。しかしその「臨床知」発見の過程には相矛盾する二つの契機が含まれている。そこで、昨今の教育学が臨床知の意義を再発見することの背後にある歴史的・社会的なコンテクストを解明することを通じて、相反するこの二つの契機を浮き彫りにし、さらにはその二種類のコンテクストとその二つの契機の関係を問うた。
55.自然の不均衡――デューイのいう「経験」はどこまで自然なものなのか？	単	2001年06月01日	『日本デューイ学会紀要』第42号、212-217頁。	デューイの「自然」概念につきまとう「自然の歴史化」と「自然の再構成」という、相反する二側面の関係について考察した。その結果、R．ローティが行ったような批判は回避できるとしても、別の新たな問題が浮上した。情報消費社会においては、自然としての「経験」の構造的に安定した側面も、また従うべき規範としての側面も次第に侵食されつつあり、その意味で経験は次第に自然なものでなくなりつつあるという問題である。
56.政治意識の回復と教育観の転換	単	2000年03月30日	『教育学研究』第67巻第1号、48-50頁。	利益誘導型の学校教育が政治意識の剥奪現象に荷担していることを指摘した上で、政治意識の回復のための教育観の転換を試みた。すなわち、政治観の転換を踏まえて、教育を「さまざまな文化の公共的実践に参加し、各々の実践に固有の〈善さ〉（〈よく生きること〉）の実現をめざす活動を通じて知性－道徳性－身体をたえず生成させていくこと」として捉え直し、そのような転換のための手がかりについて検討した。
57.批判的選択の倫理の基本構造――ポスト近代的倫理の教育（Ⅰ）	単	1998年02月27日	『金沢大学教育学部紀要　教育科学編』第47号、47-64頁。	近代の批判的選択の倫理を「ポスト近代的な」思想の立場から再構成する試みの導入的段階の考察として、伝統的な倫理学・倫理思想の中の継承すべき成果を踏まえながら批判的選択の倫理の基本構造を解明した。最初に批判的選択の倫理が要請される背景やその原初的な様式を確認した上で、この批判的選択の基本的様式を四つの角度から具体的に明らかにしてみた。
58.批判的選択の倫理の再構成――ポスト近代的倫理の教育（Ⅱ）	単	1998年02月27日	『金沢大学教育学部紀要　教育科学編』第47号、65-86頁。	近代の批判的選択の倫理を「ポスト近代的な」思想の立場から再構成するために、批判的選択につきまとう客観主義や啓蒙主義の痕跡を取り除くことを試みた。まず道徳的推論の規則の適用の方法をめぐる現代の議論（R．M．ヘアの説）が抱えている問題点を指摘し、次に道徳的推論の規則が要求する「他者の立場に立つ」ことの意味と方法を再構成し、最後に道徳的推論の規則に従えば人びとは合意できるとする諸説を批判した。
59.戦後教育の哲学的基底――自己矛盾としての〈子ども尊重〉の思想の“乱熟”	単	1997年05月01日	『教育哲学研究』第75号、6-11頁。	戦後日本において、人間化をめざしたはずの教育はなぜ、人間の非人間化を招来するという逆説に陥ったのか。戦後の教育思想が信奉していた〈子ども尊重〉の思想、すなわち〈人間形成〉という近代のプロジェクトを「人間化」しようとする思想こそが、この逆説を生み出したとする観点に立って、〈子ども尊重〉の思想が、戦後の社会構造や教育政策の変遷と連動しながら〈人間形成〉に内在する問題点を露わにしていく過程を明らかにした。
60.イデオロギーとしての学力保障論――生産主義的教育観を超えて	単	1996年10月12日	『教育目標・評価学会紀要』第６号、59-68頁。	虐げられた人々の救済をめざしたはずの学力保障論は、皮肉なことに、学習者に対して新たな抑圧を引き起こす。本稿では、学力保障論に内在するこの抑圧の構造の一端を解明することを目的とした。学力保障論をその基底部で支えている教育理念を生産主義的教育観と呼び、それが抱えている難点を二点にわたって指摘した。そのうえで、学力保障論がその歴史的社会的性格ゆえに、今日問い直しを迫られていることについても言及した。
61.デューイによる近代批判の諸相と特質――経験と成長	単	1996年09月06日	『近代教育フォーラム』第５号、117-126頁。	デューイを通説と反対に近代批判の思想家として位置づけることを試みた。まずデューイによる近代批判の諸相と特質を浮き彫りにするために、デューイの経験概念が「目的合理性」（M．ウェーバー）に対する批判の論理を、独特の形で内在していることを指摘した。さらにそのことを踏まえて、デューイの「経験の再構成」としての「成長」論を近代社会の否定的側面を乗り越えるための教育論として新たに位置づけ直した。
62.２１世紀の学校教育では知識・理解をどのように捉えるのが望ましいか	単	1996年02月01日	『変化の時代の学力観――次代を拓く教育課程』（『教職研修・臨	菱村幸彦監修・有園格編集。〈近代〉の問いなおしという潮流に立つと、従来の学校で考えられてきた「知識・理解」の捉え方には根本的な疑問が生じ、知識観や理解観の再考が迫られてくる。そこではまず、従来の「知識・理解」の捉え方にはどのような問題があ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
			時増刊号』）108-113頁。	り、知識や理解はどのように捉えなおすべきなのかについて論じた。さらに学校を、身体と感情の総体を動員して新たな知識を理解する場、異他的な世界との出会いを通じて自己を変革し、新たな知識・文化を創造していく拠点として位置づけなおした。
63.発達の脱神話化のために	単	1995年08月26日	『近代教育フォーラム』第４号、35-44頁。	森田尚人氏のフォーラム報告論文に対するコメント論文。森田氏による発達の脱神話化の試みを支援し後押しするという観点に立ち、かつ氏が明らかにした具体的成果に立脚しつつ、「前成説－後成説」という論争的枠組の解明を「遺伝－環境」の論争的枠組に支配された発達観の批判につなげていくために森田氏が採っている戦略に対して、一つの疑問と対案を投げかけた。
64.知行不一致現象の原因とそれへの教育的対応法―― 心情主義的道徳教育論批判（Ⅱ）	単	1995年02月28日	『金沢大学教育学部紀要　教育科学編』第44号、227-246頁。	知行不一致現象の発生を、意志の弱さや意欲（心情・態度）の欠如によってではなく、逆に認識・理解の内実によって具体的に説明できる基本的な枠組を提示することを試みた。さらに、その枠組を踏まえて、その現象に教育がいかに対応すべきかについて考察し、克服すべき知行不一致現象に対してはそれを克服するための、克服すべきでないその現象に対してはそのようなものとして適切に対応するための、〈主知主義的な〉教育方法の基本的枠組を提言した。
65.近代という状況に組み込まれた教育理論――心情主義的道徳教育論批判（Ⅲ）	単	1995年02月28日	『金沢大学教育学部紀要　教育科学編』第44号、247-267頁。	心情主義的道徳教育論の乗り越えのためには、それを要請し下支えしているより広範囲の理論的・実践的基底をも併せて解体する必要がある。まず、心情主義的道徳教育論が内在的な問題点以上の、より根元的な難点を抱え込んでいることを示した。さらに、その道徳教育論は、近代の道徳観、近代の認識論（教育観）、近代社会の基本構造によって支えられており、その克服のためには、それら道徳観や認識論や社会構造の組み替えが必要であることを指摘した。
66.〈他者〉との共生のための道徳教育――伝達と寛容の二元論を超えて	単	1994年09月01日	『教育学年報３――教育のなかの政治』、355-382頁。	森田尚人・藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編の論文集。世織書房。近代認識論への批判という思想上の動向を踏まえて、従来の啓蒙的な道徳教育論に対する批判を試みた。まず啓蒙的な道徳教育論が否定してきた実質的道徳原理の伝達に再び意義が認められるようになることを指摘した後に、道徳教育が担うべき新たな本質的課題として「〈他者〉との共生」というテーマがあることを確認した。さらに、その課題に応えるための基本的な方略について論じたうえで、伝統的な教育（学）が「〈他者〉の共生」にとって桎梏となっていることを明らかにした。
67.デューイ理解の転換に向けて――二元論的枠組みに基づく解釈からの離脱	単	1994年06月01日	『日本デューイ学会紀要』第35号、89-94頁。	どのようなパースペクティヴからデューイをながめるかによって、デューイは混乱と卑俗の権化にも、反対に時代の刺激的なトップ・ランナーにもなりうる。一方で、否定的なデューイ像をももたらした伝統的なデューイ理解が依拠しているパースペクティヴは、デューイ思想の実像把握を妨げている。このような問題意識に立って、伝統的なデューイ理解の多くがどのような点で問題を抱えており、それゆえデューイ理解の転換をいずれの方向に進めるべきかについて、彼自身が試みた二元論の克服というテーマを題材に、その概要を論じた。
68.道徳的規範理解の構造（1)――心情主義的道徳教育論批判（Ⅰ）	単	1994年02月28日	『金沢大学教育学部紀要　教育科学編』第43号、221-237頁。	「してはいけないとわかっているのにやってしまう」いわゆる知行不一致現象を、知行二元論や認識・情意・行為の三分法に依拠した教育方法によって解消しようとする道徳教育論を批判するための予備的作業を試みた。知行二元論やそのコロラリーとしての諸々の三分法に対する擁護と批判の系譜を概観することを通じて、道徳的規範認識の捉え方が両系譜間の争点になっていることを示し、道徳的規範を理解することの基本構造を、理解一般の構造と関連づけながら明らかにした（前半）。
69.道徳的規範理解の構造（2)――心情主義的道徳教育論批判（Ⅰ）	単	1994年02月28日	『金沢大学教育学部紀要　教育科学編』第43号、239-252頁。	「してはいけないとわかっているのにやってしまう」いわゆる知行不一致現象を、知行二元論や認識・情意・行為の三分法に依拠した教育方法によって解消しようとする道徳教育論を批判するための予備的作業を試みた。知行二元論やそのコロラリーとしての諸々の三分法に対する擁護と批判の系譜を概観することを通じて、道徳的規範認識の捉え方が両系譜間の争点になっていることを示し、道徳的規範を理解することの基本構造を、理解一般の構造と関連づけながら明らかにした（後半）。
70.〈逃走〉理論の批判	単	1993年02月	『金沢大学教育学	「道徳原理の伝達としての道徳教育（Ⅰ）」で提示した立場の提案

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
的考察（1)――道徳原理の伝達としての道徳教育（Ⅲ）			部紀要　教育科学編』第42号、219-240頁。	に対する反対派による応答を予想し、それらに対して批判的な考察を加えることを目的とした。その反対派の所説を〈逃走〉理論と総称し、それをいくつかの種類に分けてそれらの問題点を指摘した。本稿(1)では、「素朴な逃走理論」と「客観主義的な逃走理論」と呼ぶものの問題点を指摘した上で、「イデオロギー批判的な逃走理論」と呼ぶものを批判するための理論的基盤（プラグマティズム的－解釈学的な存在論的＝認識論）を確認した。
71.〈逃走〉理論の批判的考察（2)――道徳原理の伝達としての道徳教育（Ⅲ）	単	1993年02月	『金沢大学教育学部紀要　教育科学編』第42号、241-262頁。	「道徳原理の伝達としての道徳教育（Ⅰ）」で提示した立場の提案に対する反対派による応答を予想し、それらに対して批判的な考察を加えることを目的とした。その反対派の所説を〈逃走〉理論と総称し、それをいくつかの種類に分けてそれらの問題点を指摘した。本稿(2)では、(1)での理論枠組みに立脚しつつ「イデオロギー批判的な逃走理論」の根本的なアポリアを指摘し、われわれの立場が不可避の選択肢であることを明らかにした。
72.〈闘争〉理論の批判的考察（1)――道徳原理の伝達としての道徳教育（Ⅱ）	単	1992年02月	『金沢大学教育学部紀要　教育科学編』第41号、1-22頁。	「道徳原理の伝達としての道徳教育（Ⅰ）」で明らかにした立場に対して、従来の道徳原理の教育推進派が寄せると考えられる批判について検討した。それらを〈闘争〉理論と総称し、さらに三つの種類（通俗的ないしは素朴な闘争理論、「哲学的」闘争理論、ポスト近代的な闘争理論）に分類した。それぞれの固有の理論的性格や具体的事例を明らかにした上で、それぞれについて、あるいはいくつかのグループにまとめて、闘争理論のアポリアを指摘した（前半部）。
73.〈闘争〉理論の批判的考察（2)――道徳原理の伝達としての道徳教育（Ⅱ）	単	1992年02月	『金沢大学教育学部紀要　教育科学編』第41号、23-44頁。	「道徳原理の伝達としての道徳教育（Ⅰ）」で明らかにした立場に対して、従来の道徳原理の教育推進派が寄せると考えられる批判について検討した。それらを〈闘争〉理論と総称し、さらに三つの種類（通俗的ないしは素朴な闘争理論、「哲学的」闘争理論、ポスト近代的な闘争理論）に分類した。それぞれの固有の理論的性格や具体的事例を明らかにした上で、それぞれについて、あるいはいくつかのグループにまとめて、闘争理論のアポリアを指摘した（後半部）。
74.８０年代アメリカ教育改革論の中のデューイ――『パイデイア提言』への批判	単	1991年06月	『日本デューイ学会紀要』第32号、131-136頁。	Ｊ．デューイの理論を1980年代アメリカの教育改革論議の中に位置づけて、その今日的意味を探ることをめざした。Ｍ．Ｊ．アドラーを代表者とするパイデイア・グループが1982年に発表した『パイデイア提言』で主張される教育理念の意義をまず確認にした上で、デューイの教育論の視点から『提言』のもつ問題点を指摘し、両者の学校教育論のパースペクティヴの特質と関連について総括することを課題とした。
75.道徳原理の存在的基盤の分析と正当性の探究――道徳原理の伝達としての道徳教育（Ⅰ）	単	1991年02月	『金沢大学教育学部紀要　教育科学編』第40号、1-22頁。	実質的な道徳原理の伝達をめぐっては伝達肯定派と否定派の対立があるが、ここではその対立の打開をめざすための基礎的探究を試みた。道徳原理はいかにして成立するのか、まずその成立過程を論理的に分析し、その成立過程にまつわる問題を明らかにした。さらに、道徳原理をイデオロギーとして考察することを通じてその問題の解決を試み、伝達に値する内容をもった正当な道徳原理を確定するための条件を解明した。
76.社会的行為を「わかる」ことの論理的前提	単	1990年07月	京都大学教育学部教育指導・教育課程研究室編『Ｂコース共同研究報告論集Ⅱ――カリキュラム改革をめぐる諸問題』、54-65頁。	社会的行為を「わかる」ことの論理的前提を明らかにすることにより、その「わかる」を「社会的行為をそれが位置づけられる論理的構造や論理的文法と一体のもの」として規定した。そのうえで、この論理的前提の解明が、社会的行為を「わかる」ことをめざす授業の内容を検討・批判したり構成・選択したりする際にどのような分析の視点を提供するのか、その分析の視点が特に社会科の授業や理論に対し具体的に何を提言するか、について考察した。
77.個性教育の意味と基本原則（1）	単	1990年07月	『金沢大学教育学部教科教育研究』第26号、51-60頁。	人間の「個性」の用法をめぐる対立を踏まえながら「人間が個性的であるための条件」を明らかにした上で、個性教育の二つのタイプを分類し、イデオロギーとしての個性教育と対比させながら、本来の個性教育とは何かについて検討した。さらに、本来の個性教育を実現するための教育方法、教育内容等に関する基本原則についても、制度的・社会的構造の問題とも関係づけながら、いくつかの点にわたり提言した（前半部）。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
78.個性教育の意味と基本原則（2）	単	1990年07月	『金沢大学教育学部教科教育研究』第26号、61-78頁。	人間の「個性」の用法をめぐる対立を踏まえながら「人間が個性的であるための条件」を明らかにした上で、個性教育の二つのタイプを分類し、イデオロギーとしての個性教育と対比させながら、本来の個性教育とは何かについて検討した。さらに、本来の個性教育を実現するための教育方法、教育内容等に関する基本原則についても、制度的・社会的構造の問題とも関係づけながら、いくつかの点にわたり提言した（後半部）。
79.個性教育の両義性	単	1989年06月	『日本デューイ学会紀要』第30号、122-125頁。	現在のわが国の教育が抱えている諸問題を克服するものとして位置づけられている個性重視や個性尊重の教育について、二つの意味を区別した。ひとつはその問題の本来の積極的な解決法としての個性教育であり、もうひとつは消極的で逃げの姿勢をもった、虚偽の解決法としての個性教育である。この両者の違いを概説し、その違いを区別する必要性を指摘した。
80.２つのレベルの批判的道徳思考力の発達――デューイ全体論的道徳教育論の再構成の試み	単	1989年02月	『金沢大学教育学部紀要　教育科学編』第38号、207-228頁。	道徳的推論の方法論的規準の自律的使用をめざして批判的道徳思考力の発達をもくろむ今日一般的な道徳教育論に対し、すでに理論的に乗り越えられていると思われていたＪ．デューイが、実は独自の観点から斬新でより根源的な主張をなしうることを明らかにした。デューイは形式的な方法論的規準を「経験」の方法によって批判することも道徳教育の視野にいれていたのであり、その観点から教育それ自体が道徳教育だとする彼の説を再構成することを試みた。
81.Ｒ．Ｍ．ヘアの道徳判断力発達観――「原理の決定」の論理に注目して	単	1987年07月	『関西教育学会紀要』第11号、65-68頁。	現代英米系の倫理学界の第一人者であるヘアの理論を、ヘアが自らの哲学的分析の観点から個人の道徳判断力の発達をどのようなものとして捉えているか、ヘアがその「発達」ということばに込めた規範的意味にどのような問題点があるか、という点から考察した。
82.デューイの「非記述主義的」倫理学とその教育的意義の解明の視点	単	1986年06月	『日本デューイ学会紀要』第27号、60-65頁。	「経験的自然主義」を標榜するＪ．デューイが、メタ倫理学上の概念としての「倫理的自然主義」「記述主義」を世評と異なりいかにして回避するかについて、彼の論理学や意味論に基づき４つの側面から究明した。さらにデューイ倫理思想の非記述主義的立場が今日隆盛の道徳教育諸論にいかなる貢献をするのかを解明する際の視点・立脚点についても４点ほど提案し、デューイ理論再考のための端緒づくりを試みた。
83.探究の論理と道徳教育論――デューイによる「メタ倫理的相対主義」批判の意義	単	1986年03月	『京都大学教育学部紀要』第32号、214-224頁。	道徳判断の合理的正当化の方法の不可能論すなわちメタ倫理的相対主義対するＪ．デューイの批判の特徴について、①彼が道徳判断形成のより全体的かつ動的視点からその正当化の論理を追求している点、②その批判が分析哲学系の論者のものに比べてより徹底したインドクトリネーション批判を可能にする点に焦点を当てて考察した。そして、その批判が現代道徳教育論に与える意義や、そこに内在する問題点とその克服の可能性について明らかにした。
84.道徳教育に到達度評価は適用可能か	単	1985年09月	『到達度評価』第5号、29-33頁。	情意的性向や人格発達に到達度評価が適用可能かという問題意識に立って、その評価論の道徳教育への適用可能性について考察した。道徳についての批判的思考の教育に限定した上で、思考の方法的枠組や思考の実際の状況での機能をめぐる教育に即して、試論を展開した。
85.教育評価の典型としての到達度評価の概念について	単	1985年08月	『京都大学教育指導・教育課程研究室共同研究報告論集――教育評価の基礎的研究』、40-51頁。	自己教育を含めたあらゆる教育活動には、その活動の適切性について価値判断を行い、その結果に応じてその活動を調整・改善する反省作用、すなわち教育評価が不可欠である。今日わが国でいう到達度評価をこの教育評価の典型と捉える見地から、その基本的な意味を明らかにするために、その歴史的背景と論理的根拠に照らして到達度評価と呼ばれるための最低限の資格について考察し、またそれと絶対評価や相対評価との区別についても論究した。
86.戦後初期教育評価と通信簿	単	1985年08月	『京都大学教育指導・教育課程研究室共同研究報告論集――教育評価の基礎的研究』、118-129頁。	戦後初期の通信簿の様相や性格について、通信簿の意義が教育的な指導へ貢献するものとして明確化されたこと、通信簿が指導要録への消極的・間接的な批判の役割を負わされていたこと、通信簿が指導のための評価という理念の実体化を試みる場として位置づけられていたこと、の３点から考察した。
87.コールバーグの道徳教育論とインドクト	単	1983年06月	『関西教育学会紀要』第７号、44-	知識・信念・態度などを閉塞したものとみて固定化して教え込むものとしてのインドクトリネーションはふつうは否定的な評価的意味

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
リネーション			48頁。	をもつ。このインドクトリネーションをどのようにして回避するかは道徳教育の目標・方法・内容に関わる重要な問題のひとつであるが、それを回避する仕方について、アメリカの心理学者・道徳教育の理論家であるコールバーグの所説を検討した。
その他				
1．学会ゲストスピーカー				
1.「資質・能力」の育成と「考え、議論する道徳」――今の学校のＯＳで新しいアプリを使えるか？	単	2023年7月9日	日本カリキュラム学会第34回大会、大阪教育大学天王寺キャンパス	課題研究Ⅲ――「特別の教科　道徳」の功罪）」（with 西野真由美・服部敬一）
2.時代の課題としての学習観・能力観の転換――リスクとしての学校教育	単	2022年7月18日	日本教師教育学会・公開学習会（課題研究部会Ⅰ主催）	講演@Zoom
3.公教育としての道徳教育に期待すること――何について「考え、議論する」のか	単	2022年2月23日	日本道徳教育方法学会オンラインセミナー Winter2022	講演および対談（with 上地完治）
4.教育と人間の変容の中の教育学教育――「育てる」教育のために大学に何ができるか	単	2019年11月16日	関西教育学会第71回大会、関西学院大学（上ケ原キャンパス）	公開シンポジウム：「人を育てる人」を育てる――いま、改めて大学における教育学教育の意味を考える（他の登壇者：内田良、鮫島京一）
5.道徳を再発見する教科へ――アンラーン(unlearn)という課題	単	2018年11月17日	九州教育学会70回大会、南九州大学・都城キャンパス	「総合部会」テーマ：「特別の教科　道徳」という不安／希望――「考え、議論する道徳」の行方 他の登壇者：広田照幸、新谷恭明
6.虚空に漂う教育――人間不在の「資質・能力」論の陥穽	単	2018年10月06日	教育哲学会第61回大会、山梨学院短期大学	「研究討議」テーマ――「資質・能力」を哲学する 他の登壇者：青柳宏幸、奈須正裕
7.道徳科の可能性と課題――道徳についてなぜ「考え、議論する」必要があるのか	単	2017年06月10日	日本教育方法学会第20回研究集会、慶應義塾大学三田キャンパス	シンポジウム――「特別の教科 道徳」への対応を検討する 他の登壇者：塩崎義昭
8.道徳科教育をシティズンシップ教育として再定義する――そのために考えるべきいくつかの問題	単	2017年05月27日	日本教育学会「近畿地区」研究活動、神戸大学発達科学部	シンポジウム――いま道徳教育とシティズンシップ教育を考える 他の登壇者：柴原弘志、杉浦真理
9.道徳教育とアクティブラーニング――デューイを媒介として	単	2016年9月17日	日本デューイ学会第60回研究大会、岐阜大学	課題研究：デューイと道徳教育――アクティブラーニングの可能性と課題（シンポジスト）
10.道徳教育と生活指導の連帯の可能性を探る――オーセンティックな道徳教育の立場から	単	2015年09月05日	日本生活指導学会第33回研究大会、岡山大学	「課題研究――生活指導と道徳教育のあり方を問う」報告者。 他の登壇者：澤田好江
11.オーセンティックな道徳教育へ――道徳・倫理の多様性と学校教育	単	2014年12月06日	日本道徳性発達実践学会第14回大会、立命館大学	記念講演
12.生き方の転換とホームの再定義――ガイドとしての道徳・倫理	単	2014年06月28日	日本家庭科教育学会第57回大会、岡山大学	基調講演
2．学会発表				
1.『教育学のパトス論	単	2021年5月	日本教育学会・近	シンポジウム――『教育学のパトス論的転回』を読む（発表者）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
的転回』と４人の発表をつなぐためのコメント		30日	畿地区シンポジウム（@Zoom）	（他の発表者　第１部：鵜野祐介、大塚類、倉石一郎、坂井祐円）
2.ラウンドテーブル・指定討論	共	2017年10月15日	教育哲学会第60回大会、大阪大学	ラウンドテーブル３「道徳授業は道徳的でありうるか？――教材『手品師』から考える」（山岸賢一郎企画・報告、鈴木篤及び山口裕毅報告）において指定討論者として参加。
3.教育の因果モデルと呼応モデル――教えることの諸相	単	2013年10月12日	教育哲学会第56回大会、神戸親和女子大学	研究討議(全体シンポジウム）：「教えること」と「学ぶこと」――教育的関係の再構築（シンポジスト）
4.ケア論の盲点としての自由の問題――リベラリズムをどのように超えるか	単	2013年09月22日	日本デューイ学会第57回研究大会、新潟青陵大学	課題研究：デューイとケア論（シンポジスト）
5.NCLB法的な思考の威力と陥穽――教育の「正論」を問いなおす	単	2012年09月22日	日本デューイ学会第56回研究大会、東洋大学	シンポジウム：NCLB法（どの子も置き去りにしない法）と日本への影響を吟味する（シンポジスト）
6.国民国家という磁場の中の日本の教育学――教育の黄昏か、それとも新たな夜明けか？	単	2012年09月17日	教育哲学会第55回大会、早稲田大学	課題研究：国家と教育――これまでの教育哲学、これからの教育学（シンポジスト）
7.教育学のカノンとしてのデューイとはだれのことか――全体論と還元主義	単	2011年09月19日	教育思想史学会第21回大会、日本大学	コロキアム：教育学のカノンとしてのデューイ――過去・現在・そして未来
8.リベラリズムと道徳の根拠――道徳は「生きる」ための手段か？	単	2010年8月22日	日本教育学会第69回大会、広島大学	テーマ型研究発表：道徳教育の改革動向――価値多元化社会における道徳教育の基本的課題
9.文化衰退の時代における教育のゆくえ	単	2008年10月25日	教育哲学会第51回大会、慶應義塾大学	研究討議：「教育問題」としての文化（シンポジスト）
10.シンポジウム・指定討論	単	2007年08月29日	日本教育学会第66回大会、慶應義塾大学	公開シンポジウム：日本における教育思想の伝統と系譜――近世教育思想研究の視点から（指定討論者）
11.日本におけるデューイの受容――希望と困難のアイロニカルな交錯	単	2006年09月30日	日本デューイ学会第50回記念研究大会、早稲田大学	国際シンポジウム：デューイはアジアの国々に何を与えたか――そして、それから（シンポジスト）
12.シミュレーションとしての学習と教育――電子メディア、自己、契約としての教育	単	2006年08月24日	日本教育学会第65回大会、東北大学	公開シンポジウム：ITの時代における教育学（シンポジスト）
13.情報消費社会におけるデューイ教育思想のパラドクス	単	2005年10月09日	日本デューイ学会第49回大会、鹿児島大学	課題研究：デューイと現代教育の課題（シンポジスト）
14.道徳からの逃走、氾濫する〈規範〉	単	2004年10月17日	教育哲学会第47回大会、横浜国立大学	課題研究：価値多様化社会における「規範」の問題（シンポジスト）
15.表象の学習／生としての学び――学ぶことの二つの系譜	単	2004年09月18日	教育思想史学会第14回大会、日本大学	「フォーラム」報告
16.学力論の言語と視線――情報消費社会の中での破綻	単	2001年10月21日	教育哲学会第44回大会、福岡教育大学	課題研究：「学力論」の問題圏（シンポジスト）
17.リベラリズム批判の	単	2001年09月	教育思想史学会第	コロキアム：リベラリズムの「再審」をめぐって――宮寺晃夫『リ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
中の〈リベラリズムの教育哲学〉		15日	11回大会、東京大学	ベラリズムの教育哲学』をもとにして
18.自然の不均衡――デューイのいう「経験」はどこまで自然なものなのか？	単	2000年10月21日	日本デューイ学会第44回大会、富士短期大学	シンポジウム：デューイの自然観（シンポジスト）
19.排除と再組み込み――教育学における「臨床知」発見の両義性	単	2000年09月16日	教育思想史学会第10回大会、目白大学	シンポジウム：教育学における「臨床知」の歴史（シンポジスト）
20.政治意識の回復と教育観の転換	単	1999年09月03日	日本教育学会第58回大会、玉川大学	シンポジウム：政治と教育――教育は何であり、何でないか（シンポジスト）
21.戦後教育の哲学的基底――自己矛盾としての〈子ども尊重〉の思想の“乱熟”	単	1996年10月06日	教育哲学会第39回大会、東京学芸大学	課題研究：戦後の教育を問い直す――教育哲学からのアプローチ（シンポジスト）
22.教育目標への問いの構造転換に向けて――教育目標の分類学的プロジェクト批判	単	1995年10月14日	教育目標・評価学会第６回大会、鹿児島大学	課題研究：教育における「目標」の根拠を問う（シンポジスト）
23.デューイにおける近代批判の諸相と特質	単	1995年08月29日	近代教育思想史研究会［1997.4より教育思想史学会］第５回大会、中央大学	シンポジウム：デューイと近代（シンポジスト）
24.デューイ理解の転換――二元論の克服の意味をめぐって	単	1993年09月10日	日本デューイ学会第37会大会、東京国際大学	課題研究：デューイ再評価（シンポジスト）
25.国民教育パラダイムとデューイの学校教育論	単	1990年09月13日	日本デューイ学会第34会大会、甲南女子大学	課題研究：デューイの教育理論と最近のアメリカ教育改革（シンポジスト）
26.個性的人間の形成と教育の方法	単	1988年09月09日	日本デューイ学会第32回大会、福岡工業大学	パネル・ディスカッション：個性教育について（パネリスト）
27.教科教育における道徳教育――デューイのアプローチの再検討	単	1987年08月	日本教育学会第46回大会、大東文化大学	
28.Ｒ．Ｍ．ヘアの道徳判断力発達観――「原理の決定」の論理に注目して	単	1986年11月	関西教育学会第38回大会、滋賀大学	
29.思考の基準の起源と道徳教育の目的――デューイの主張をめぐって	単	1986年10月	日本デューイ学会第30回大会、兵庫教育大学	
30.デューイ倫理学の「自然主義」的性格と道徳教育論	単	1985年10月	日本デューイ学会第29回大会、早稲田大学	
31.道徳原理の教育――Ｊ．デューイとＲ．Ｍ．ヘアからの示唆	単	1984年09月	日本デューイ学会第28回大会、同志社大学	
32.コールバーグの道徳教育論とインドクトリネーション	単	1982年10月	関西教育学会第34回大会、立命館大学	
３．総説				
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.課題研究に関する総括的報告	共	2022年5月10日	『教育哲学研究』第125号、46-49頁。	松浦良充との共著。2021年9月開催の教育哲学会大会第64回会・「課題研究」に関する報告。
2.『教育学のパトス論的転回』を読む（１）――さまざまな臨床の視点から	共	2022年3月31日	『大阪大学教育学年報』第27号、41-55頁。	岡部美香、大塚類、坂井祐円、鵜野祐介、倉石一郎、松下良平、古波藏香、の共著。日本教育学会・近畿地区シンポジウム（2021年5月30日）「シンポジウム――『教育学のパトス論的転回』を読む」の概要報告。
3.正解なんてないのに、なぜ教師は正解を求めるのか	単	2022年2月	『道徳教育』第62巻第2号、66-67頁。	コラム：内容項目はいつの時代もどんな状況でもすべて正しいのか
4.趣味は世界を道徳的混乱から救う	単	2021年11月	『TASC MONTHLY』（公益財団法人 たばこ総合研究センター編）No. 551、3頁。	「随想」（巻頭言）
5.「図書紹介：ヘレン・M・ガンター（末松裕基・生澤繁樹・橋本憲幸訳）『教育のリーダーシップとハンナ・アーレント』」	単	2021年10月1日	『日本デューイ学会紀要』第62号、2021年10月1日、52頁。	
6.教育の新たな可能性と危険な罠――いずれの道を選ぶのか	単	2021年10月	『教職研修』第590号、108-109頁。	特集：データ駆動型社会における人間と教育
7.不同意のすすめ――時代に逆行する学校を問う	単	2021年9月	『教育研究』（筑波大学附属小学校　一般社団法人 初等教育研究会編）第76巻第9号、22-25頁。	特集：ひとりの意見を大切にする「対話」
8.学校教育センター教師教育研究部門・これからの共同研究について	共	2021年3月31日	武庫川女子大学学校教育センター『学校教育センター紀要』第6号、266-276頁。	田中毎実・松下良平の共著。武庫川女子大学学校教育センター・研究部門の今後の研究のあり方について方向性を提言したまとめ。
9.学校教育センター教師教育研究部門・全研究員集会プログラムのまとめ（武庫川女子大学学校教育センター教師教育研究部門 2019年度全研究員集会）	単	2020年03月31日	武庫川女子大学学校教育センター『学校教育センター紀要』第5号、153-156頁。	
10.図書紹介：坂越正樹監修、丸山恭司・山名淳編『教育的関係の解釈学』	単	2020年03月31日	『教育学研究』第87巻第1号、140-141頁。	
11.思想なきアクティブラーニングを転換する	単	2019年10月12日	『体育科教育』第67巻第11号、12-17頁。	未来が予測困難な社会では創造的な思考や新たな知の探究が求められる。そのような思考・探究を促しつつ継続させるためにアクティブラーニングの必要が喧伝され、対話型や協働型や課題解決型の学習方法が各教育現場で導入されている。しかし、アクティブラーニングを「教授・学習法」とみなす考え方には限界があり、むしろ教育や学習についての考え方の転換が必要であることを指摘した。
12.生の実相に寄り添う道徳教育へ（連載「特別の教科　道	単	2019年09月01日	『学校教育』第1225号、62-63頁。	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
徳」の課題と展望⑥）				
13.道徳は毒にも薬にもなる（連載「特別の教科　道徳」の課題と展望⑤）	単	2019年08月01日	『学校教育』第1224号、62-63頁。	
14.時代の正体vol.3――忘却に抗い、語りつづける	共	2019年07月15日	神奈川新聞「時代の正体」取材班編、現代思潮新社、233-238頁。	《インタビュー》「時代の正体〈499〉道徳教科化（下）主権者教育の場に」（『神奈川新聞』2017年7月17日）の再録。
15.道徳の常識を問い直す（連載「特別の教科　道徳」の課題と展望④	単	2019年07月01日	『学校教育』第1223号、62-63頁。	
16.正解のない道徳について「考え、議論する」授業（連載「特別の教科　道徳」の課題と展望③）	単	2019年06月01日	『学校教育』第1222号、62-63頁。	
17.正解のない道徳――無償の愛はよきものか（連載「特別の教科　道徳」の課題と展望②）	単	2019年05月01日	『学校教育』第1221号、62-63頁。	
18.「考え、議論する道徳」は何を変えるのか（連載「特別の教科　道徳」の課題と展望①）	単	2019年04月01日	『学校教育』第1220号（広島大学附属小学校・学校教育研究会）、62-63頁。	
19.人権教育と道徳教育（特集：現代的課題を考えるための道徳教育①）	単	2019年04月01日	『子どもの道徳』119号（光文書院）、12頁。	
20.コメント:「（フォーラム）道徳って何だっけ」		2018年10月08日	『朝日新聞』（東京本社）	ロング・バージョン「根拠欠く教科書　どう評価？悩む先生　教科になった道徳」『朝日新聞』（ネット配信記事）（2018.10.8）
21.書評：古川雄嗣『大人の道徳――西洋近代思想を問い直す』	単	2018年09月	共同通信社配信新聞記事	
22.《インタビュー・コメント》教育「考」差点：道徳　どんな授業になる？――自分と違う意見に学ぶことが本質	単	2018年04月01日	『朝日新聞』（東京本社）	
23.《評論》指標――中学校道徳教科書検定	単	2018年03月31日	共同通信社配信『静岡新聞』（2018.3.31）『佐賀新聞』（2018.3.31）『高知新聞』（2018.4.1）『山梨日日新聞』（2018.4.2）『山形新聞』（2018.4.3）『中国新聞』（2018.4.6）『京都新聞』（2018.4.7）	
24.図書紹介：山住勝広	単	2018年03月	『教育学研究』第	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
『拡張する学校――協働学習の活動理論』		31日	85巻第1号、105-106頁。	
25.「研究する」ってどういうこと？――「教育」について研究する中で考える	単	2018年03月19日	武庫川女子大学教育研究会『武庫川教育』第55号、1-4頁。	
26.鑑識眼的評価と哲学的思考――評価の枠組みから教育を問い直す	単	2018年02月22日	『児童教育』第28号、47-52頁。	評価の枠組みから教育を捉え直し、その文脈の中で鑑識眼的評価について考えることを通じて、教科「てつがく」が扱う哲学的思考について考察した（お茶の水女子大付属小校内研における講演を再構成したもの）。
27.「状況的学習」「脱構築」	単	2017年09月30日	教育思想史学会編『教育思想事典・増補改訂版』勁草書房	
28.《インタビュー》【時代の正体　499】道徳教科化（下）主権者教育の場に	単	2017年7月17日	『神奈川新聞』	神奈川新聞「時代の正体」取材班(編)『時代の正体vol.3――忘却に抗い、語りつづける』（現代思潮新社、2019年7月15日、233-238頁）、に再掲。
29.「考え、議論する道徳」の評価	単	2017年06月01日	加藤宣行編『子どもに寄り添う道徳の「評価」』光文書院、24-25頁。	「考え、議論する道徳」の評価を指導に活かすためのポイントについてまとめた。
30.巻頭言	単	2017年03月19日	『武庫川研究論集』第12号	
31.《対論》論点――変わる道徳教育：深く多面的に考える場	単	2017年02月24日	『毎日新聞』朝刊（大阪本社）	俵義文氏との対論形式。
32.道徳についてなぜ、何を考えるのか	単	2016年03月01日	『道徳教育』No.693、7-9頁。	「論説／「読む道徳」から「考える道徳」への転換」の一論稿。「考え議論する」道徳の登場は、社会の大きな変化に対応している。「道徳」授業が今後大胆に変革を遂げていかざるをえないとき、道徳について何を考え議論すればいいのか、いくつかの視点を提示し、教科書や評価の問題についても触れた。
33.《評論》判断力鍛える主権者教育を	単	2016年01月28日	『毎日新聞』夕刊（大阪）	「１８歳からの一票（下）」
34.Book Review：公教育改革の方向性を問い直す：広田照幸『教育は何をなすべきか――能力・職業・市民』	単	2015年09月01日	『教職研修』第517号、114頁。	
35.《インタビュー》「答えのない問い」を考える道徳教育の旅	単	2015年07月01日	『第三文明』No.667、72-74頁。	
36.《評論》学校と政治、境界線再考を――冷戦思考の行政は足かせ	単	2015年06月18日	（共同通信配信評論記事）『東奥日報』『デーリー東北』『河北新報』『京都新聞』『神戸新聞』『愛媛新聞』『山陰中央新報』『熊本日日新聞』『大分合同新聞』（以上、2015.6.18）『山形新聞』(2015.6.19)『長崎新聞』(2015.6.20)『岐阜	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
			新聞』(2015.6.26)	
37.「道徳科」学習指導要領の可能性と落とし穴	単	2015年05月	『子どもの道徳』第110号、光文書院、7-8頁。	
38.教科化が迫る道徳授業の根本的な転換	単	2014年08月01日	『道徳教育』No.674、68-70頁。	リレー連載「教科化時代の道徳授業――未来予測と提言」
39.《対論》「争論――道徳の教科化」	単	2014年05月24日	『新潟日報』2014.5.24 『佐賀新聞』2014.5.27 『秋田魁新報』2014.5.29『岩手日報』2014.5.31『山形新聞』2014.6.2 『中国新聞』2014.6.3『福井新聞』2014.6.4『山陰中央新報』2014.6.8『高知新聞』2014.6.19『中部経済新聞』2014.6.23『南日本新聞』2014.6.25	共同通信社企画。岡崎勝氏との対論。
40.学校における道徳教育はどこへ向かうのか	単	2014年04月01日	『指導と評価』第712号、9-11頁。	
41.グローバル化時代の道徳教育について考える――規範教育から市民教育へ	単	2014年02月20日	『児童教育』第24号、37-44頁。	
42.道徳教育の振興――学校における徳育の教科化を中心として：弘道シンポジウム2013の記録	共	2013年12月31日	『弘道』第1087号、22-59頁。	●再録：貝塚茂樹監修・解説『日本道徳教育論争史 第III期――戦後道徳教育の停滞と再生　第15巻「心のノート」と道徳の「教科化」論争』日本図書センター、2015年1月。 パネリスト：貝塚茂樹・杉原誠四郎・鈴木明雄・松下良平 コーディネーター：菱村幸彦
43.書評：田中智志・橋本美保著『プロジェクト活動――知と生を結ぶ学び』	単	2013年09月14日	『近代教育フォーラム』第22号、269-273頁。	
44.日本教育学会中部地区研究会・記録集『自治体の教育計画・評価と学校の教育計画・評価』	共	2013年08月20日	日本教育学会中部地区研究会実行委員会	報告１(福本秀夫報告）のコメンテーター等
45.道徳教育に教科書は必要か	単	2013年06月30日	『弘道』第1084号、17-22頁。	●再録：貝塚茂樹監修・解説『日本道徳教育論争史 第III期――戦後道徳教育の停滞と再生　第15巻「心のノート」と道徳の「教科化」論争』日本図書センター、2015年1月。 「道徳教科書を考える」という特集テーマへの寄稿。道徳教育に教科書を用いるという発想について批判的に検討した。
46.道徳教育について、本当のことを考えよう	単	2013年05月	『子どもの道徳』（光文書院）第104号、3-4頁。	
47.日本教育学会中部地区研究会記録集『教育実践から教育実践記録への変換とその研究』	共	2012年08月20日	日本教育学会中部地区研究会実行委員会	全体討論の司会・まとめ
48.教育の理念なき大学改革の危うさ	単	2012年08月	『教育学術新聞』（日本私立大学協	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
			会）	
49.研究討議に関する総括的報告	共	2011年05月10日	『教育哲学研究』第103号、24-30頁。	2010年10月の教育哲学会大会「研究討議」（全体シンポジウム：テーマ「言語・知識・道徳――知の教育の可能性を求めて」）の司会者としてのまとめ。鳥光美緒子と共著。
50.書評：藤井千春『ジョン・デューイの経験主義哲学における思考論――知性的な思考の構造的解明』	単	2011年03月31日	『教育学研究』第78巻第1号、82-84頁。	
51.巻頭エッセイ：体育と道徳教育の関係を問う	単	2011年02月	『体育科教育』第59巻第2号、9頁。	
52.哲学することの教育哲学	単	2010年05月10日	『教育哲学研究』第101号、170-172頁。	教育哲学研究についての自由な小エッセイ。
53.巻頭言	単	2009年09月	『近代教育フォーラム』第19号	
54.図書紹介：柳沼良太『ローティの教育論――ネオ・プラグマティズムからの提言』	単	2008年11月	『教育哲学研究』第98号、106-109頁。	
55.学校教育の空洞化への挑戦――寺岸実践から何を学ぶか	単	2008年06月	寺岸和光『「かかわりの力」で学級が変わる――対話する学びが育てるもの』三学出版、166-176頁。	寺岸和光氏による実践記録と実践理論をまとめた本への解説
56.図書紹介:ネル・ノディングス（宮寺晃夫監訳）『教育の哲学――ソクラテスから〈ケアリング〉まで』		2007年11月	『教育哲学研究』第96号、209-211頁。	
57.（公開シンポジウムⅠ報告）シミュレーションとしての学習と教育――電子メディア、自己、契約としての教育	単	2007年03月	『教育学研究』第74巻第1号、91頁。	日本教育学会大会「公開シンポジウム」報告の概要
58.子ども・若者の道徳――いま何が問題か	単	2007年01月	『金沢大学サテライトプラザ・ミニ講演記録』第７巻第10号（通巻73号）、全41+8頁。	
59.図書紹介：田中智志・山名淳編『教育人間論のルーマン――人間は〈教育〉できるのか』	単	2006年03月	『教育学研究』第73巻第1号、61-62頁。	
60.教育はどこへ？	単	2005年08月10日	『北國新聞』夕刊	
61.楽しさと背中合わせの非情・悲劇	単	2004年08月	『現代教育科学』第575号、11-13頁。	「提言／楽しい授業・学校論の問題点――児童中心主義の空しさ」
62.図書紹介：土戸敏彦編『〈道徳〉は教えられるのか？』	単	2003年11月	『教育哲学研究』第88号、129-130頁。	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
63.子どもたちとのかかわりが生みだす自己研鑽	単	2003年10月	『学校教育』（広島大学附属小学校・学校教育研究会）第1035号、70-75頁。	リレー連載「生涯にわたって成長しつづける教師像」
64.図書紹介：柳沼良太著『プラグマティズムと教育――デューイからローティへ』	単	2002年12月	『教育学研究』第69巻第4号、110-111頁。	
65.（対談）「子育て座談会」	単	2000年05月	『広報まっとう』石川県松任市役所、No.508、8-11頁。	
66.書評：土戸敏彦著『冒険する教育哲学――〈子ども〉と〈大人〉のあいだ』	単	2000年05月	『教育哲学研究』第81号、124-130頁。	
67.「ジェーン・アダムス」「解釈学」「訓育」「道徳」	単	2000年05月	教育思想史学会編『教育思想事典』勁草書房	
68.「愛国心の教育」「国旗・国歌の取り扱い」「学校知」「生命に対する畏敬の念」「徳目主義」「ポストモダンとカリキュラム」	単	1999年05月	天野正輝・武村重和編『教育課程重要用語３００の基礎知識』明治図書	
69.子どもたちの抱える虚無――その根底にあるもの（上・下）	単	1998年03月	『北國新聞』1998年3月16日＆17日	
70.近代的理性の両義性と到達目標――現代日本の教育課題に到達目標－評価論は応えることができるか	単	1996年05月	全国到達度評価研究会『研究会報』No.22、5-6頁。	
71.「道徳」授業の新たな可能性――馬場一博実践は何を提起したか	単	1992年05月	『授業づくりネットワーク』No.53、22-27頁。	
72.（翻訳）「至高の学習経験」	単	1986年03月	Ｂ．Ｓ．ブルーム著、稲葉宏雄・大西匡哉監訳『すべての子どもにたしかな学力を』明治図書	
６．研究費の取得状況				
1.学習論の観点からの道徳教育論の再構築	単	2015年4月～2023年3月		基盤研究（Ｃ）
2.学校教師の力量形成を志向した授業研究の方法論に関する研究	共	2008年04月～2011年03月		科学研究費補助金、基礎研究（Ｂ）、課題研究番号20330190、研究者代表・藤原彰、分担者・木原成一郎・松崎正治・吉永紀子・村井淳志・松下良平・鋒山泰弘・山崎雄介・松下佳代）
3.ライフヒストリー的アプローチを活かした総合的な教師の力量形成――新たな教員養成プログラムの開発を見据えて	共	2004年04月～2006年03月		科学研究費補助金、基礎研究（Ｂ）(1)、課題研究番号16330176、研究者代表・森脇健夫、分担者・山崎準二・木原成一郎・松崎正治・藤原彰・村井淳志・松下良平・鋒山泰弘・山崎雄介・岸本実・伊藤博之・松下佳代・長谷川豊
4.ポスト近代社会にお	共			科学研究費補助金、基礎研究（Ｂ）、課題研究番号：21330179、研

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
６．研究費の取得状況				
ける概念とその形成・評価に関する研究				究者代表・松下佳代、分担者・伊藤実歩子・石井英真・樋口太郎・杉原真晃・遠藤貴広・樋口とみ子・松下良平、2009-2011年度）

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2021年9月～2022年9月	日本デューイ学会機関誌・編集委員長
2.2017年10月～2019年10月	教育哲学会機関誌編集委員・編集委員長
3.2015年10月～2017年10月	教育哲学会機関誌編集委員（副編集委員長）
4.2015年9月～2018年9月	教育思想史学会・会長
5.2013年10月～2025年09月	日本デューイ学会理事
6.2010年10月～2025年10月	教育哲学会理事
7.2009年9月～2012年9月	教育思想史学会機関誌・編集委員長
8.2009年8月～2015年8月	日本教育学会理事
9.2008年1月～2009年12月	日本教育学会機関誌編集委員
10.2007年10月～2009年10月	日本デューイ学会機関誌編集委員
11.2003年10月～2007年09月	教育哲学会機関誌編集委員
12.2003年9月～2024年9月	教育思想史学会理事
13.2003年9月～2009年9月	教育思想史学会機関誌編集委員